

Nickel Yellow

ニッケルイエロー

Vol.2

2012年秋号

「午後0時の時計台 お菓子の匂いに誘われて」

星野真奈美

「闇に走れば」

姉崎あきか

「フローラの追憶 第二部 女神達の溜息」

ブルーアイリス

表紙イラスト

平田みな子 <http://ameblo.jp/milkpowder3/>

1. [本文1](#)
2. [本文2](#)
3. [本文3](#)
4. [本文4](#)
5. [本文5](#)
6. [本文6](#)
7. [本文7](#)
8. [本文8](#)
9. [本文9](#)
10. [本文10](#)
11. [本文11](#)
12. [本文12](#)
13. [本文13](#)
14. [本文14](#)
15. [本文15](#)
16. [本文16](#)
17. [本文17](#)
18. [本文18](#)
19. [本文19](#)
20. [本文20](#)
21. [本文21](#)
22. [本文22](#)
23. [本文23](#)
24. [本文24](#)
25. [本文25](#)
26. [本文26](#)
27. [本文27](#)
28. [本文28](#)
29. [本文29](#)
30. [本文30](#)
31. [本文31](#)
32. [本文32](#)
33. [本文33](#)
34. [本文34](#)
35. [本文35](#)

36. [本文36](#)
37. [本文37](#)
38. [本文38](#)
39. [本文39](#)
40. [本文40](#)
41. [本文41](#)
42. [本文42](#)
43. [本文43](#)
44. [本文44](#)
45. [本文45](#)
46. [本文46](#)
47. [本文47](#)
48. [本文48](#)
49. [本文49](#)
50. [本文50](#)
51. [本文51](#)
52. [本文52](#)
53. [本文53](#)
54. [本文54](#)
55. [本文55](#)
56. [本文56](#)
57. [本文57](#)
58. [本文58](#)
59. [本文59](#)
60. [本文60](#)
61. [本文61](#)
62. [本文62](#)
63. [本文63](#)
64. [本文64](#)
65. [本文65](#)
66. [本文66](#)
67. [本文67](#)
68. [本文68](#)
69. [本文69](#)
70. [本文70](#)
71. [本文71](#)
72. [本文72](#)

73. [本文73](#)
74. [本文74](#)
75. [本文75](#)
76. [本文76](#)
77. [本文77](#)
78. [本文78](#)
79. [本文79](#)
80. [本文80](#)
81. [本文81](#)
82. [本文82](#)
83. [本文83](#)
84. [本文84](#)
85. [本文85](#)
86. [本文86](#)
87. [本文87](#)
88. [本文88](#)
89. [本文89](#)
90. [本文90](#)
91. [本文91](#)



午後0時の時計台

お菓子の匂いに誘われて

星野真奈美

イラスト たかはしいちこ



氷が解けかけるような少し冷たく湿った空気が、物と人でごった返した広場を上からやさしく

撫でていく。セツはその手のひらを追うように空を見上げた。空は薄い白い雲がどこまでも広がっていて青い色はほんの少ししか見えない。アプリコットの月に入ってからそれはそれまでの凍るような青い空が、そういうあいまいな乳色の曇り空に変化していた。柔らかな春の水色の空が見られるのもあと少しだろう。そうなれば、野に街に花が溢れ、それを見に家族で外に出かけることも増えるに違いない。

セツはさきほどからおしゃべり広場の定例市を、犬のサリーと見て回っていた。サリーはすらっとした四肢を持つ黒い毛並みのサルーキで、その瞳は深い知性を湛えている。セツが、香ばしい匂いを漂わせているローストチキンの屋台や色とりどりの果物を切り分けているフルーツパーラーなどに惹きこまれても、セツがこちらの世界に戻って来るまで道端で足をそろえて待っていた。

サリーは不思議な犬だ。他の犬のようにいつも興奮してやかましくおしゃべりすることもないし、小動物を無闇に追いかけておもちゃにすることもない。それどころかセツがやんちゃなことをすると、両親に代わってたしなめる。サリーの声は深い森の中から湧いてくる綺麗な泉を思わせて、セツがどんなに興奮していてもその声音は心を冷静にさせるところがあった。

セツが、もう何軒目になるか分からない、現れては消えるマジックボールに惹かれて足を止めた時、サリーはいい加減に痺れを切らしたのかセツをおいてとことこと歩き出した。慌ててセツはサリーを追う。セツの足音に驚いたのかパン売り場の下に群がっていた小鳥たちがばたばたと空に飛び立った。

「サリー、サリーったら！どこに行くんだよ！」

「ジェームズのお店に。そろそろ帰らないと心配するでしょうし」

「でも、まだお昼ご飯まで時間があるよ。パパはぼくたちが店にいると邪魔だから他の店を見てこいって言ったんだし...いいよ、分かったよ。サリーは欲しいものないの？ 今度はサリーが見たいところに行くよ」

「私は千里眼を使えるんですよ、セツ。見たいものは、どこに居ても見られます。さあ、今日の冷やかしはおしまい。帰りましょう」

セツがそれでも抵抗を試みているうちに、二人は父親のジェームズが店番をしているテーブルの前までやって来た。テーブルには赤と白のチェックの布がかけられて、上に母親のコニーとその友人たちが作った雑貨が置かれている。ノミの跡の残る小さな木彫りの小鳥、花とツタの模様が彫られた飴色の小物入れ、先が猫の耳の形になったブックスタンド、細かい幾何学模様の描かれた陶器のカップ、花のつぼみの形をしたランプシェイド...セツが目を輝かせてそれらを触ろうとするたびに、サリーは、気をつけてくださいね、と注意するのだった。テーブルの奥には、コート掛けが二本立っていて、そこにはセーターやベスト、不思議な色合いのワンピースがかかっている。父親のジェームズはその二つのコート掛けに挟まれた椅子に座って、新聞を読んでいた。微動だにしないのでうっかりすると商品の一部に見える。

「ジェームズ、ただいま帰りました」

「...ああ、サリーにセツか。もう七日市の探検は良いのかい？ お昼にはまだ早いが...」

新聞用の眼鏡をはずしてジェームズは立ち上がった。同じ体勢をしていて凝ったのか、肩をぐるぐると回す。

セツは口を尖らせてサリーに抗議した。

「...ほら言ったとおりだろ？ また見て回って来ようよ。トニーさんのとこのマジックボールとかポケット銃のお試しなんてここだけでしかできないんだから。帰りにスージーおばあさんのお菓子屋に寄って皆の分のお菓子も買うからさ」

「...いや、今日は、スージーおばあさんは店を出してないぞ」

ジェームズの口から飛び出た言葉に、セツは動揺する。

「え、そうなの？ どうして？」

「...心配することはない。大事な用事があって娘さんの家に行っているんだ。また来週の市には元気な姿を見せてくれるさ」

スージーおばあさんの娘さんは、夫や息子とずっと遠いところで暮らしているらしい。それは、この精霊と魔法に溢れた世界ではなく、精霊も魔法もない人間がうようよしている世界だと聞いたことがある。まだ移動魔法が使えない小さなセツは一人では行くことができない。でも、そんな怖そうな世界には一人で行かない方が正解かもしれない。

「...そっか、スージーおばあさんには、また会えるんだね」

セツは、ほっと胸をなでおろしたが、これでトニーのお店へ行く口実が減ってしまったことには変わらない。新たな口実を考えこんでいると、ジェームズが助け舟を出してくれた。

「...そういえば、今日から新しく菓子を売る店もあるようだよ。コニー母さんがえらく興味を持っていたからなあ。ついでにその菓子を買ってきてくれるかな？」

セツにお駄賃分も含めてお金を渡したジェームズをサリーがたしなめる。

「ジェームズ、あまりセツを甘やかしてはいけません」

そんなサリーに、セツは力をこめて言い切った。

「サリーは厳しすぎるよ。ベル先生みたい」

ベル先生とはセツの通う小学校の先生で、堅物で融通がきかないことで有名だ。それがちょっと嫌だったのか、サリーは鼻をひくつかせると、いいでしょうと言った。

「おもちゃを見る代わりに、ちゃんと家族におみやげも買うこと。それなら、私も同行します」

広場の大時計が十一時五十分を指している。トニーのお店で、投げると一瞬消えるマジックボールと、引き金を引くと爆発音と閃光がするポケット銃をちゃっかり買ったセツは満足顔でサリーと歩いていた。一方のサリーはセツが買ったものが汚らわしいものであるかのように一歩離れて歩いている。上機嫌なセツは、それには構わずサリーに声をかけた。

「サリー、ぼくはまだ目に魔法をかけるのが下手なんだ。君の目で新しいお菓子屋の場所を探してよ」

「まったく、なんてわがままな子なんでしょう。私が子供のころと比べて」

「はいはい、分かったから。ほら、急がないとお昼になっちゃうよ」

将来が心配ですと言いながらも、サリーはしっかり千里眼で広場を見て回ったようで、こちらに来なさい、とセツを案内し始めた。昼に近くなるにつれて人がどんどん広場に流れこんでいる。セツはサリーを見失わないようにしっかりついて行かなければならなかった。ところが、色とりどりの古着を売っている一角を曲がった時、黒いサリーの姿がどこにもないことにセツは気づいた。もっと先にいるのかもしれない。古着や古道具の店ばかりに囲まれながら、セツは人の波に乗って、中央の時計塔からどんどんおしゃべり広場の端の方へと歩いていった。

ボンボンボン...

時計塔の方からかすかに午後0時を告げる鐘が聞こえてきた時、変化は突然やってきた。目の前の景色がダブって見え、そしてそのまま絵画のように静止する。色が褪せ、こすったようににじんでいった。

世界が全て止まった時、セツ一人がもとのままだった。心臓がバクバク鳴っている。なにが起こったのかもどうして起こったのかも分からず、あたりを見回してサリーの姿を探した。しかし、世界はにじんでしまって一つ一つがなんであるのか見分けるのは、もはや不可能だ。助けを求めるようになおもきよろきよろとあたりを見まわしていたセツは、にじんでいない小さな店を見つけた。混沌とした世界で小さな秩序ある世界を守っているその店からは、ふわふわとお菓子の匂いまで漂ってくる。深い闇の中に一つのともし火を見た気がして、セツはふらふらとその店に近づいた。

なんでも取り揃えております。ザック菓子店。

と店の前の黒板に白いチョークで書かれている。その言葉の通り、店のテーブルにはさまざまなお菓子が並んでいる。こってりとして少ししょっぱいバターの匂いがするビスケット、はちみつよりも甘いキャラメルの匂いがするマドレーヌ、遠い異国を思わせる刺激的なシナモンの匂いのチュロス、ふわふわと軽いバニラの匂いのワッフル。中には花の形をしたケーキもあったし、チョコレートでできた小さい家もあった。菓子を載せたテーブルの向こうには、薄茶色の髪を後ろで一つに結んでいる若い男が笑顔で腕をあげた姿のまま立っている。セツがそれらをしげしげと見てみると、急に世界にまた変化が訪れた。

ぶれていた景色がザック菓子店、いや正確には店の後ろのライラックの木を中心に、ピントが合っていく。しかし今度見えてきた世界はおしゃべり広場ではなくもっと色あせた世界だった。みなグレーや紺のコートを着て、足早にセツの周りを通り過ぎていく。黒くて硬い地面に、天まで延びるような四角いコンクリートの建物がずらっと道に沿って並んでいた。すぐ横では冷たい光沢を放つ車がいくつもいくつもびゅんびゅんと走っていく。

お気に入りのおもちゃを抱えてセツは心細さに泣きそうになった。どうやら移動魔法にかかってあの恐ろしい人間たちのうごめく世界に迷い込んでしまったことが分かってきたが、帰り方が分からない。一つだけ希望があるとしたら、それはサリーだ。古びた木は、世界と世界をつなぐ「扉」だということはサリーにもベル先生にも教わったことがある。だから、ザック菓子店の

後ろにあるライラックの木から離れずにサリーが助けに来てくれることを待つしかない。

ザック菓子店は、建物と建物の間にあるわずかな緑道に面して立っていた。ここにセツが来てからだいぶ時間が過ぎたように思えたが、一向にサリーは現れない。その間にときおり小さな子どもがお母さんの手を引いてお菓子をねだっては買ってもらっていた。若い店員は愛想よくお客様に対応している。

寒さと空腹にだんだん耐えられなくなってきて、セツは、その場でこそっと足踏みをし始めた。それでも我慢できなくなると、じっと奥歯を噛みしめて考えこんだ。

(もしかしたらこのお店の店員さん、向こうの世界の人だったりしないかな。ううん、向こうの人じゃなくてもいいや。もう一人は嫌なもの)

とうとうそういう結論に達して、セツはザック菓子店に近づいた。思い切って店員の男に話しかける。

「あの、ぼくはおしゃべり広場から来たんですが、帰り方が分からないんです」

それを聞いた男性店員はセツを手招きしテーブルの裏に呼びこむと、営業の合間を縫ってセツに話しかけた。

「ぼうやも向こうの世界の人だつてのは分かるよ。こちらの世界の間とは匂いが違うから。名はなんというんだい？ ...セツか。俺はザック。生まれはぼうやと同じ向こうの世界だが、今はこちらの世界で、菓子を売っているんだ。さっき、帰り方が分からないといったけれど、じゃあ、どうやってぼうやはここに来たんだい？」

セツは安堵のあまりふらふらと地面に座りこみそうになった。今までの経緯を詳しく説明すると、ザックは興味深そうに相槌を打ちながら聞いてくれた。といっても、彼は目の前を通る客への対応も怠らない。器用な人だ。

「なるほどなあ...誰かがなにかの方法で、君だけに移動魔法をかけたのかもしれないね。移動魔法事故というのも昔からあるし。帰れなくて困っているなら、おしゃべり広場まで俺と一緒にいこうか？」

うなずきかけて、セツはサリーのことを思いだした。サリーは今もきっとセツを探している。ザックに送ってもらえばセツは家に帰ることはできるかもしれないが、行き違いになってサリーはずっとあてもなくセツを探し続けなければいけないかもしれない。そう思うと、ここを離れるわけにはいかない。

「...ザックさん、ありがとうございます。でも、やっぱりぼくはサリーが来るのをもう少し待つてみます。サリーはきっとぼくのことを見つけてくれると思うので」

サリーを思い自ら決断したセツを横目に、ザックはどこか羨ましそうにうなずいた。

「ぼうやはいいなあ...そうやって信頼する者がいるんだから。大事にしなよ、サリーちゃんを」

「はい。...あの、サリーが来てくれるまで、ぼくここにいてもいいでしょうか。そのかわりなにかお手伝いします」

「お、そりゃ、ありがたいな。じゃあ、お菓子が売れたら袋に入れてお客さんに渡してもらって

もいいかな」

初めての場所で初めての試み。ザックにときおり袋の受け渡し方やおじぎの仕方などを習いながら、セツは次々に袋を渡していった。

「お疲れさん。ほら、これでも食って休んでいてくれ」

そう言われてビスケットを受け取ったセツは、テーブル奥にある椅子にちょこんと納まって、それをほお張った。バターがしっかりしみこんでいて噛むたびに濃厚な香りが口中に広がる。勢いよく食べすぎて、のどを詰まらせたセツにほかほかと湯気の立つ紅茶が差し出された。ザックが見かねて保温ポットから紅茶を入れてくれたのだ。セツはそれを両手で掴んで、ぐっと飲み干す。そうすると熱い液体とビスケットがお腹に流れこんで、体の中を巡っていくような心地さが広がっていった。きっとお菓子を買って行った人たちもこんな気持ちになるのだろう。そう思うと、こちらの世界の人は得体が知れない、という恐怖は流されて、セツの心の中は温かい気持ちで満たされるのだった。

ザックはまた仕事の合間を縫って、セツに話しかけてきた。

「セツのおかげでほとんど今日の分は売り切れだ。ありがとな。それでちょっと聞きたいことがあったのを思い出したんだが、おしゃべり広場に今日開店する店があるって、さっきセツは言ってたろう？ ...そう、今までにない新しいお菓子を出すって噂の菓子店さ。実はそれ、俺の弟弟子のジャックが開く店でね。ここに来る前、そこがどんな様子だがセツは見たかな？ ...見てない、そうか...」

それきり営業モードに戻ってしまったザックの様子をセツはじっと眺めた。もしかして、ザックはジャックという人の店を見に行きたいのだろうか？ 弟弟子のことが気にかかっているのかもしれない。

「あの、ザックさん」

ザックが二人の女性にマドレーヌを売り終わったのを見計らってからセツは話しかけた。ザックは珍しくぼんやりした顔をしていたが、セツの声に我に返ったようで、彼の方に顔を向けた。

「なんだい、セツ？」

「あの、よかったらぼくが店番しているので、ジャックさんのお店を見てきたらどうですか？」

そう言われてザックは自分の店を見下ろした。そこにはガラスのケースに入ったケーキが残っているばかりだ。ザックはつぶやく。

「...そうだな、店もそろそろ終りだし...会いに行くか」

よしと言いながら戦闘前の戦士のように肩を鳴らすと、ザックはセツに店番を頼んで、ライラックの木から向こうの世界へ飛んでいった。

セツはザックを見送った後、テーブル奥の店員の位置に収まった。一つの店を任されたことが誇らしく、つい鼻を高く掲げたくなる。ザックの真似をして営業スマイルを顔に貼りつけながら誰かお客は来ないかと周りを見回していたセツに、さっそく一人の少年が近寄ってきた。その少年は、パーカーのポケットに無造作に手を突っこんでぶらぶらと歩いてきた。アーモンド形の目

はセツを上から下まで調べるようにグルグルと動いている。少年は店の前まで来ると、やあと気さくに話しかけてきた。セツも礼儀正しくいらっしやいませ、と応じる。

「ふーん、あんたこの店員？ 新しく来たの？ 俺、ばあちゃんや母ちゃんとよくここに来てんだけど、いつも切り盛りしてるの茶髪の兄さんだよな？」

間髪いれずに質問してくる少年の隙をついてなんとかセツは口を開く。

「あの、ぼくはたまたまここにいるだけです。ザックさんならちょっと出かけています。ザックさんにご用ですか？」

「いや、別に。俺その人とそんなに親しくないしね。それで？ いつもの兄さんはいつ帰ってくるの？」

「それは、ちょっと分かりません」

ふーん、と言ったきり少年は口をつぐみ、じろじろとセツとお菓子を眺めた。なにも言わずにそこに立つ少年はちょっと不気味でセツは身じろぎする。セツの居心地悪そうな気持ちを読み取ったのか、少年は、安心させるように、にっと笑顔になった。

「そうなんだ、まあいいや。じゃあ、俺、母ちゃんへのプレゼントにしたいから、そのケーキもらおうかな」

「あ、ありがとうございます！」

セツは慣れない手つきでケーキを箱にしまう。そして、顔に全神経を集中して会心の笑みを浮かべ、箱を少年に手渡した。少年も笑顔で箱を受け取ると、手を振り去って行く。ありがとうございました、と言いかけてセツは一番大事なものを忘れていたことに気づいた。

「お客様、お金は?!」

セツの言葉が聞こえていないのか、いや、聞こえたからなのか、少年は突然走り出した。

泥棒だ！

待て！泥棒！と叫ぶも、泥棒が待つてくれるはずもない。セツの足では追いかけても間に合わないだろう。助けてもらおうにも先ほどはあれほどいた通行人も今はいない。

セツは、あることにはっと気づく。そしてテーブルの下にあった紙袋から、トニー謹製マジックボールを取り出した。そして、半身をそらせて腕を引きボールを思い切り少年に投げつけようとする。

セツは、あ、と口を開ける。横の建物から目の前にお腹の大きな妊婦が出てきたのだ。

あぶない！

しかし、セツの体はとまらない。弓が引かれて矢を放つように、体はねじれた状態から元の状態に引っ張られ、指の先からボールが飛んでいく。そのボールを追いかけようとしてバランスを崩しセツは前に倒れた。

ボールは空気を切り裂き飛んでいく。そして妊婦に当たる直前で、ふっと消えた。

彼女はなにごともしなかったかのように道を横切ってセツの方へ歩いてくる。

セツがあっけにとられていると、消えていたボールが、ふっとまたいきなり現れて、先を行く少年の頭に、ごとと命中した。少年が倒れる。

そういえば、あのボール、消えたり現れたりするんだっけ。

セツはもう一つ大事なことを忘れていたことに気づいたのだった。

セツは、ポケット銃を持ち、そろそろと少年に近づいた。この銃なら見た目がしっかりしているので威嚇に使えると判断したのである。うつぶせに倒れている少年の頭をつんつんと銃でつつく。しかし、少年は微動だにしない。つんつん。まるで死んでいるようだ。つん—
「うっとうしい！ やめろって！」

起き上がった少年がハエを払うように腕をぶんぶんと回す。セツは一瞬ひるんだものの、顔をできるだけ怖く見えるようにゆがめて、お金を催促するように手を差し出した。少年がセツを睨み返す。

「なんだよ。金は後で払うから、ツケといて」

「信用できない！ だって、さっき逃げようとしただろ！ 今お金を払ったら許すよ。でも、また、逃げようとしたら本気で撃っちゃおうよ」

セツはポケット銃を少年に向けた。少年がびっくりしたように銃を見つめる。

「...用事を思い出したんだよ。今日は母ちゃんの誕生日でさ、そろそろパーティーが始まるから早くケーキを家に持って帰らなきゃいけないんだ。本当は、金はどこかで落としたんだ。だから、今日だけは見逃してよ」

「そんなこと言ってもだまされないぞ！」

少年はため息をつき、うつむいた。

「あ、ケーキがぐちゃぐちゃになってる」

「え？」

「あー、困ったな、頭を打たれて気を失ったりしなければこんなことにはならなかったのに、見てくれよ、これ」

少年の様子がいかに残念そうで、セツは自分が悪いことをしたような気がしてきてしまった。彼が箱を差し出してくるので、気になってしまってその中をのぞきこむ。少年からわずかに気がそれる。

指がねじられる感覚がしたと思うと、セツはポケット銃を少年に奪われていた。少年は、にっと笑って、それをセツに向ける。

「さ、形勢逆転。ほかに怪しいものは持ってないよな。ちょっとポケットを見せて、うわっ」

怒ったセツが猛突進してきて、少年は慌てた。

「おい、これが見えないのか?! 本当に撃っちゃまうぞ！」

「もう、怒った！ お前なんかぼこぼこにしてやる！」

やめろって危ないだろ、と少年が叫び後ずさるが、セツは引かない。二人はもみくちやになって転がり、銃を奪い奪われ、銃口があちらこちらを向く。そのうち、どちらかの指が、引き金を、引いた。

その瞬間、あたりに閃光が走り、爆音が鳴り響いた。

光が去った後の世界で、セツはゆっくり目を開けた。耳がキンキンするが、ポケット銃が光と音のするオモチャだということは忘れていなかったのだから、引き金を引く時は目をつぶった。なんにも知らない少年は目がくらんだようだ。地面に転がってうんうんうなっている。

周りに人が集まってきた。その中に思わぬ知り合いがいて、セツは、あ、と口を開ける。向こうの女性も驚いたように、あら、と口を開けた。動揺が広がるように、彼女のスカートも揺れる。遭遇した出来事をもう一度確かめるように、スージーおばあさんは、あら、とつぶやいた。

「ごめんなさいね、セツちゃん、ウィードがバカなことをして。代金は後で払うから。でも、セツちゃんとウィードがあの子の店で偶然会うなんて、やっぱり世の中不思議な力が働くものね」

全ての事情をセツから聞いたスージーおばあさんはしみじみと語る。盗みを働こうとした不屈者の少年はウィードといい、スージーおばあさんの孫で、セツとウィードが出会ったお店の主人ザックは、スージーおばあさんの弟子の一人だったらしい。

「あの、なんでスージーおばあさんはここに？」

「今日の夜は娘の誕生日会でね、ウィードと誕生日プレゼントを買いに来ていたんだけど、ウィードったら一人でふらっといなくなってしまうから、ずいぶん探し回っていたの」

「俺は、誕生日会なんか出たくねーよ。ばあちゃん一人で買い物してくれよ」

ウィードの言葉にセツはむかむかした。やっぱりケーキを母親にプレゼントするという話は嘘だったのだ。

「仕方ないわね、なにか他に言いたいことはあるかしら」

スージーおばあさんは静かにウィードに聞く。その声にも表情にも怒りは含まれていない。セツは意外だった。これがサリーならもっと怒っているだろう。ウィードは、しばらく黙っていたが、もごもごと小声でごめんなさいと言い、じっとしてられなくなったように歩き出した。セツは声をあげる。

「ウィード！ どこに行っちゃうの？」

「さあ。できるだけ、ここから遠いところに」

それだけ言うと、ウィードは日が傾きかけて寒さの厳しくなってきた世界へと、一人立ち去った。

「スージーおばあさん、なんでウィードは皆を悲しませることをあんなにたくさんするの？」

なんとなく、セツはさきほどボールをぶつけそうになった妊婦を思い出す。ウィードだってああして母親のお腹にいたはずなのになんで誕生日を祝ってあげられないんだろう。スージーおばあさんは、セツが大事な宝物であるかのように、まぶしそうに見つめた。

「ウィードは家が嫌いなのよ。自分を縛るあらゆるものが嫌いなの。きっと縛るものがない樂園をいつも探しているのね。きっとそれは遠くにあると思っているんじゃないかしら」

「ふーん、じゃあ、サリーはウィードにとって天敵だね。いつもなにかとうるさいし」

サリーとウィードがしかめつらをしながら並んでいるところを想像して、セツは笑ってしまう。

「ふふ、そうねえ。ウィードもそうやってセツちゃんくらい割り切ることができたら、もう少し生きやすくなると思うのだけどねえ」

将来が心配だわと、どこかで聞いたことのある台詞をスージーおばあさんはつぶやいた。

スージーおばあさんはケーキの代金をセツに払った後、ザックが帰ってくるまで一緒に待つと言ってくれたが、セツは胸を張って大丈夫ですと答えておばあさんと別れた。おばあさんは、今度は七日市で会いましょうねと小声でセツに耳打ちすると、手を振りながら去っていった。セツはそれを笑顔で見送った。

すでに日は高い建物の向こうに沈んで、空は桃色の雲が広がっている。おばあさんと別れてから大分時間が経ったが、まだザックは戻って来なかった。そして、サリーも現れる気配はない。最初は万事がうまく運んだことで元気なセツだったが、だんだんにその顔はゆがんでいった。こんなことなら、素直にスージーおばあさんに残ってもらえばよかった。そんなことまで考え始めた。そしてさらに嫌な考えが頭に浮かぶ。

もしかしたら、誰も、来てくれないかも。

心の中に芽吹いた不安の芽は、この瞬間、勢いよく心の中で成長し始めた。ザックは途中でなにかの事故に巻き込まれてしまったのかもしれない。サリーはまだおしゃべり広場でセツをずっと探し回っているのかもしれない。

もしかしたら誰にも見つけてもらえないかもしれない。

その考えが花開いた時、セツはついに緊張の糸が切れてぼろぼろ涙を流し始めた。一日の間に大変な目にあっただけでも手伝ったのだろう。前の景色がかすんでにじんでいく。

もう、お父さんが暇そうに店番する姿を見られないのかもしれない。お母さんがいろんな作品を作るのも見られないかもしれない。いつもはどうでもいいように思っていたものが、今はとても大切なものに思えた。そして、最後に思い返すのはサリー。いつもセツの面倒を見てくれたあ

の思慮深く優しいサルーキに会えないのかと思うと、声をあげてわんわん泣いてしまった。

ひとり。

頬に乾いたハンカチが当てられた。そしてひとりで涙は拭き取られていく。セツがびっくりして目を見開くと、そこには見慣れた黒のサルーキ、サリーの姿があった。

やっと見つけてもらえた。とても安心したのにまた涙と嗚咽がこみ上げてきた。そのたびにハンカチは優しく顔を拭いてくれた。

セツの気持ちが落ち着くと、サリーは、魔法でハンカチを動かすのを止め、それをセツのポケットにしまった。そして、後ろを振り仰ぐ。そこにはザックが苦笑いしながら立っていた。ザックはセツに謝る。

「遅くなってごめんな。いろいろジャックとも話すことがあって...その代わりに、偶然サリーちゃんに会ってここに連れてくることができたんだよ」

うなずくセツ。しかし、サリーは不満顔だ。

「そのサリーちゃんというのはやめていただけませんか。私は幼い子供ではありませんし」

手厳しいな、と言いながらザックは首をかいた。

「師匠の癖が移っちゃったみたいだね。勘弁してくれよ」

サリーは、まあ、いいでしょう、と小声で言うと、ライラックの木の前に行くように、セツの背中を鼻で押した。「扉」を使って向こうの世界へ帰るのだ。

サリーが呪文を唱えようとした時、おっと、待ってくれ、と言いながらザックが近寄ってきた。そして、小さな包みをセツに渡した。疑問顔のセツに、ザックはウインクする。

「ジャックの店のビスケットだよ。家族でどうぞ」

サリーとセツは顔を見合わせる。なにしろ、そのお菓子はコニーお母さんがほしがっていたものだったのだ。二人はにこりと笑いあうと、ザックにお礼を言って、ライラックに向き直った。ザックは少し離れて手を振っている。それに気づいてセツが振り返った途端、世界がゆがみ、一瞬のうちに茜色の色鮮やかなおしゃべり広場に戻っていた。

二人の長い影が、仲良く並んで両親の元へとたどり着くのは、もう少し先のこと。

闇に走れば

姉崎あきか

ワイパーがフロント硝子をひと撫ですると、眼下に夜の海が広がった。

星も月もない。境界をうしなつた空と海の真ん中で、燈台の白いひかりが消えては灯る。波の音。それとも風のうねり。湿った空気をふかく吸う。薄れゆくタバコの煙にまじって、舌尖がかすかな潮のかおりをおぼえた。

「後悔してる？」

運転席に座る恋人に、わたしはふたたびたずねる。

吹きこんだ風雨が、栗色の髪を揺らしている。返事はなかった。とりつくろう笑顔もうまれなかった。口をあけたまま、うつろな瞳が前を向いていた。

沈黙を埋めるように、小刻みなエンジン音が続く。細いあごがわずかに動き、彼がうなづいたように見えたのは、車の振動のせいだろう。

「愛してる」

そうつぶやいて彼の顔に唇をよせる。次にどんな言葉を続ければいいか、わからなかった。すっかり冷たくなっていた。わたしの唇も。彼の頬も。

ハンドルへ伸びる細い腕をさえぎらないよう、華奢な身体を抱きしめる。彼の匂いがわたしの鼻孔を襲った。

一台のカローラが走ってきた。

まばゆいヘッドライトがわたし達を照らす。アスファルトを擦りながら、対向車は去っていく。

運転手は気がついただろうか。この車に三人の人間が乗っていることに。ふたりは生きているが、ひとつは死体である。夢にも思わないに違いない。ひとりは、けっして外から見えない位置にいるのだから。

まばらな外燈がゆがむ。あわいひかりが路面にまたたいている。よわい雨がまた、視界を奪っていく。

ふたたびワイパーが踊る。ハンドルの上の彼の指。にぶく煌めく銀の指輪とカーナビの奥に、急カーブが見える。途切れたガードレール。このドライブの終着点だ。

「踏みこんで」

彼のシートベルトを外しながら、わたしは言った。

海岸道路を崖下に臨む、傾斜した山道。もうしばらくすれば、車は国道へすべり落ち、そのまま暗い海に飲みこまれていくだろう。

かるくしぼったレモンをラムコークに落とす。からりと氷が音をたてる。果実は泡をまとい、氷を押しつけて沈む。

となりに座る男が彼だと気づいたのは、飲み終えた一杯目のグラスをテーブルの端によけたときだった。

おそろしいほどの喧騒のなか、ふかみのある低い声が耳にかかった。

「かしてみ」

白い手がわたしのグラスを奪い、空の食器が重なったトレイに載せる。伸ばした腕、その右ひじのケロイドに見憶えがあった。

顔をあげると、彼と目があう。吸いこまれそうなまるい瞳。いつも微笑んでいるように見える、口角のあがった薄い唇。懐かしかった。

すらりと長い首に喉ぼとけが男を主張していたけれど、思った以上に少年の面影が残っていた。

小粒な歯を見せて、彼はじぶんのジョッキを持ちあげた。

「君の瞳にラムコーク」

「ごめん。全然意味がわからない」

「奇遇だね。俺にも、なんのことやらさっぱりだ」

笑いながら、わたしはグラスを打ちつける。

彼は再会に気づいていないようだった。

わたしはそんなに変わってしまっただろうか。変わっていないはずだ。十年という時間は、ひとを激変させることはできない。その代わりに、記憶をじゅうぶんに風化させることができる。

「あなたにとっては、その程度の過去だってことでしょ」

「なんの話？」

「昔話」

言い出そうか思案しているうちに、奥の席で先輩らしいひとが立ちあがった。

「新入生注目！ 本日は足もとのおぼつかないなか、われらが『スカイ・アンサンブル』の歓迎会にご足労」

足もとが悪いのはお前だけだろ、と野次があがる。サークルの代表らしいそのひとは、すでに真っ赤になっていた。

「まあ、あれだ。名前と学部と。それから志望するパートがあればそれも。よろしく」

代表は言い終わるなり、倒れるように椅子に飛びこんだ。豪快ないびきが響きわたる。

カメラを掲げて歩きまわっていた上級生が、進行をひき継いだ。

「誰からいこうか」

わたしの右どなりで、すっと腕があがった。一同の視線が集まる。衆目を受けとめ、歌うように彼は言った。

「こういうのはいちばん先に、と。じいちゃんの教えで」

「オーケー、君から。アンチ時計まわりで」

アンチですね、とつぶやき、彼は自己紹介をはじめた。

「朝比奈啄人です。経営学部一年」

優雅に指揮棒を振る仕草をする。七分袖の奥に、拳大のケロイドが見えては隠れた。

「楽器はユーフォニウム。ほか、ピアノ、ギター、バイオリン、なんでも」

おお、と感嘆の声がまばらにあがる。向かいに座った女の子が、うっとりとしたまなざしでタ

クトを見あげていた。

好きな言葉は希望、などと言いながら、タクトはまだ指揮者よろしく拍子を刻んでいる。ふぞろいな栗色の毛先が、円を描いて揺れる。一本一本が計算されたラインをなぞるように、美しい弧がうまれては消える。たしかに。絵になる男に成長したものだ。

語り終わるとタクトは席についた。息がかかるほどちかくわたしの耳に唇をよせ、ささやく。

「次、ヒナの番」

「なんだ。憶えてたんだ」

「当然」

「矢神陽菜です」

立ち上がって見たものの、リコーダーくらいしか演奏できないわたしに、言うべきことはあまりなかった。

「法学部一年生。楽器はなにも。入部するかどうか、まだ迷っていますが、いろいろ教えてください」

「おじさんが教えちゃうよん。手とり足とり」

先輩が腰をくねらせながら合いの手をよこした。このサークルにだけははいるまいと、わたしは決意した。

上級生の自己紹介がはじまった頃には、場はとっくになかだるみしていた。わたし達の右側にはまだ順番を終えていない新入生がいるが、先輩達はむだに長いひとり語りをつらねている。

「どういう段取りだよ」

「本当ですね」

澄んだ裏声がタクトの不平に同意した。その女の子は向かいの席で生ビールを飲んでいて。指揮棒を振るタクトに熱い視線を送っていた子だった。

「朝比奈さんって、もしかして」

「タクトでいいよ」

女の子はわずかに頬を染め、タクトさんは、と続けた。

「朝比奈隆と関係あるんですか？」

「息子。つっても、マスコミも知らない隠し子だ。誰にももらしてくれるな」

「うそ、すごい」

冗談が通じない子なのか。それとも、ひとを疑うことを知らない善人なのか。

彼の両親はふたりとも公務員だ。日本を代表する指揮者とはなんの縁もない。

得意げにジョッキをあおる頭を、わたしは軽くはたいた。かちん、と音がした。

「やばい、歯が折れた」

「彼の言葉、本気にしないほうがいいよ」

咳きこむタクトをよそに、女の子に向きなおる。

小柄でかわいらしい子だ。ひと昔前のアイドルみたいだった。波打つソバージュを高い位置で結わいて後ろに垂らしている。あどけない顔だちを恥じるように、ちいさな耳たぶを真珠のイヤ

リングで飾っていた。ピアスでないところがまた懐古的だ。

「あの、矢神さんは……」

「わたしもヒナでいい」

反時計回りの自己紹介は、なかなか目を醒まさない代表のせいで行きづまっていた。順番を待つより、じかに訊いたほうが早そうだ。

「あなたは？」

「わたりこうこ、です。渡る里、論語の孔子。ココって呼んでください」

ひと呼吸おいて、ココは続けた。

「ふたりは、お友達なんですね」

お友達、という単語を強調して言う。厚ぼったい奥二重の瞳に、ほのかな敵意の色が見えた。張りあう理由も意味もないけれど、ちょっとしたいたずら心が芽生えた。

「友達とはすこし違うかな」

すると、タクトがわたしの首に腕をまわした。ぴたりと頬が押しつけられる。

「誰にも言えない秘密を抱えた関係さ」

「やめて」

悪寒がはしり、鼓動が跳ねあがった。波のように、遠い記憶がよせては返す。粟立った両腕を伸ばし、タクトの身体をのける。

笑顔をつくって、わたしはココに告げた。

「わたし達は、ただのいところ。ほかになにもない」

自己紹介がひとめぐりしたところで、わたしは席を外した。手洗いから出てきた廊下で、タクトが待ち伏せていた。

「一緒に逃げよう」

彼は十年前とおなじ台詞を口にした。

「冗談でもあんなこと言わないで」

席に帰ろうとすると、手首をつかまれた。強い力だった。

「もう戻れないよ。先輩に話した。俺とヒナは途中で抜けて、他のサークルのコンパに顔を出すことになってる」

漆黒の瞳があやしくひかった。

「勘違いしなくていい。昔話がしたいだけさ」

「あんな話、外じゃできない」

「いい場所を知ってる」

一時間後、わたしとタクトは渋谷円山町のホテルにいた。

彼と寝るつもりはない。ただ、喫茶店やファミリーレストランでは気が進まなかった。誰にも聴かれずに話せる場所がちかくにある。そう言って、タクトはこのブティックホテルをあげた。

ペットボトルの緑茶を飲みほし、タクトはしずかに言った。

「逢いたかった」

「わたしは逢いたくなかった」

「恩人に向かって、それはないだろ」

「うん。でも本当に」

タクトを嫌っているわけじゃない。一緒にいれば、幼い思い出がよみがえる。思い出には、いやでもあの記憶がまといつく。

「当時、君はある男に身体をもてあそばれていた」

「やめて」

「でも真実だ」

子供の頃、わたし達は毎年、東北の田舎町に帰省していた。夏休み。ちょうどお盆をはさんだ数日である。滞在する期間はばらばらだが、親戚一同が祖父の屋敷に集まった。総勢二十名は超えていた。

憧憬をいざなう山々。田んぼや畑にかこまれた、牧歌的な時間。先祖の墓参りにかこつけて、めいめいが避暑を楽しんでいた。東京で生まれたわたしも、郷愁に似た懐かしさを子供心におぼえた。探検の場所がつかない古民家が好きだった。おない年のいところに逢えるのも、うれしかった。

あの男は遠い親戚にあたる。どういう血縁なのか、よく知らない。朝比奈家の複雑な家系図を、わたしははんぶんも理解していなかった。

小学校にあがった頃からだった。幼い肢体のどこかに成熟を感じ取ったのかもしれない。男は、人目を盗んでわたしの身体にふれるようになった。

ときにはすばやく。あるときは執拗に。遠慮がちだった手はしだいに大胆さを増した。背中に熱い体温を感じながら、わたしは唇を噛んで恐怖を押し殺した。

みんなには内緒だよ。身体を放すとき、男はやさしげな声で言った。たとえ口どめされなくても、誰に喋るつもりもなかった。わたしはただ棒立ちしてただけなのに、取り返しのつかないはずらに手を染めてしまった子供のようなようだった。ふくらみかけた胸の奥に、ひどい罪悪感があった。

「先に俺の話をするよ」

タクトの声で我に戻る。

「十年前、あの男がヒナの身体にさわっているのを俺は目撃したわけだ」

少年にそう告げられたとき、恥ずかしさのあまり消えてしまいと思ったことをよく憶えている。

「だからこそ、計画が実行された。ヒナひとりじゃ、あそこまでできなかつただろ」

「その話はいいいよ」

「わかった。話を戻す。さっきの言葉を正確に言いなおすと、俺は、あの男にまさぐられているヒナの身体を目撃した」

ためらいがちに言葉を選びながら、タクトは続けた。

あいつがたくしあげた服の裾から、白い背中が見えた。波のような素肌の曲線に、目がくらんだよ。

「あのときから、俺はヒナに囚われてしまった」

ヒナと逢えなくなってからもし、映像は烙印しながらに脳に焼きついたままだった。中学高校と、何人かとつきあったこともある。経験もすませた。でも、ベッドの上で、俺は目の前の女の子のことなんてまるで眼中にないんだよ。あの男に背すじを撫でられるヒナ。記憶のなかのいこの肌を、俺は抱き続けていたんだ。最後の瞬間まで。

「あの男が憎かった。それとおなじくらい、うらやましかった。その煩惱が俺の思春期のすべてだと言いきれる」

「つまり俺はロリコンである、と」

はあ、とため息をついてタクトは言った。

「なんでそうなるかな。たしかにあのときヒナは小学生だったけど。俺はべつに幼い少女の幻影を追い求めているわけじゃない」

まっすぐな視線がわたしを射抜く。

「つまり、ヒナコンだよ」

「なにそれ」

「ヒナしか愛せない異常性愛者のこと」

「タクト、酔ってる」

「俺はいつでも酔ってるよ」

ひとときの沈黙。

「……君の美しさにね、とか続けないとただのアル中になっちゃうよ」

「言ってほしいわけ？」

「いらないけど」

あのときから、とタクトは息を吸った。

「いままで、俺もヒナも時間がとまったままだった」

「わたし？」

「その格好でわかる。長袖Tシャツ。ジーンズ。サンダル。いつもそんな色気のないファッションなんだろう。男から、女として見られるのが、怖いから」

その通りだった。私服でスカートを履いたことは一度もない。制服を着なくてはならない中学高校時代は、毎日怯えながら通学していた。

「とにかく。俺がいかかわしい眼でヒナを見てることは告白した。盛大に拒絶しようが、法廷に持ちこもうが、あとはヒナの自由だ」

「べつに嫌じゃないよ、タクトなら。ちょっとひくけど」

「どっちだよ」

不思議な感情だった。

ふと、おおきな手のひらがわたしの頬をつつんだ。

「とまってしまった時計の針。すこしずつ、俺が進めてあげられないかな」

ふいに涙があふれた。タクトの言葉とは逆に、わたしの時間は巻き戻っていく。やわらかでつたない、初恋の気持ち。蛙の鳴きまねをして笑ったあぜ道。蛍を追った夜の川べり。はぐれないように手をつないだ夏祭り。タクトはいつだって、わたしのヒーローだった。

息がかかる距離まで、顔が近づく。

「ごめん。まだ怖い」

「知ってる」

少年のように微笑んで、タクトはわたしの目もとにかかる口づけ落とした。かさついた彼の唇が、わたしの涙で濡れた。

なんでもないお喋りをしながら、朝までソファに腰かけて過ごした。予行演習、と言いながらときおり唇を重ねた。なんの練習、と訊けば、俺達がいずれキスするときの、と彼は答えた。そんなふうにだまされて、六歳のわたしのファーストキスも彼に奪われたことを思い出す。あわいまどろみのような一夜だった。

べつの研究会をわたしは選んだが、タクトは例の吹奏楽サークルに入部したらしい。都合があうときは、ふたりでいることが多くなった。といっても、買い物に出かけたり、カフェでくつろいだり、友達なのか恋人なのかあいまいなつきあいだった。

歓迎会で知り合ったココとは、履修科目が重なったこともあって、ときおり会話をかわすほどの仲になった。彼女も『スカイ・アンサンブル』のメンバーだという。

新しい生活にも慣れてきた五月の初旬。二時限目を終えたわたしは、ココに誘われて昼休みを学生食堂で過ごしていた。焼き魚定食をたいらげた後、ココはおもむろに切り出した。

「ずっと気になっていました」

ココはいまだに敬語で喋る。いつか指摘したことがあるが、親しき仲にも礼儀です、とかわされた。年上扱いされたくないからだろう、とタクトは言っていた。彼女は二年浪人したらしい。

「誰にも言えない秘密って、どんなものなんですか？」

「なんの話？」

「新歓のときの。ヒナさん達は、ふたりだけの秘密を抱えてるって」

ココがタクトの話をするのはめずらしかった。彼女は彼のことが好きなのだろう。そう感じていたから、わたしはあえていとその名を出すことはしなかったし、ココもまた、彼の話題を避けていたように思う。

「秘密なんてないよ」

「迷宮入りした殺人事件の犯人達だったりして」

「まさか」

鼓動が早まった。おのれを落ちつかせるように、きつねうどんの残りを飲みほす。あの事件について、ココがなにか知っているはずがない。生真面目な彼女らしくないが、冗談のつもりなのだろう。めんつゆは塩辛く、喉がかわいた。

「犯罪って言えば、今日、社会学の講義でおもしろい心理テストをやったんですよ」

ココはそうそうに話題を変えた。わたしは胸を撫でおろす。

「心理テスト？」

「はい。じぶんが犯罪者とおなじ考え方をするかどうかわかるんです。やってみませんか？」

興味をひかれたふりをして、わたしは続きをうながした。

「Aさんという女性がいます。彼女はふたりの息子の母親なのですが、ある日、事故で長男を亡くしてしまいました。通夜の中で、なにがあったと思います？」

「参列者のなかに、長男の姿を見た」

「おもしろいけど、違います。まだ続きがあります。Aさんは通夜に来てくれたある男のひとに、ひと目惚れしてしまいました。夫の会社の同僚でした。数日後、Aさんは次男をその手で殺害してしまいます。なぜでしょう」

答えてください、とココは邪気のない表情を投げる。

心理テストというより、なぞなぞのような問いだった。ゲーム感覚で考えをめぐらし、わたしは告げた。

「夫と離婚して、同僚と結婚するつもりでいた。でも、連れ子が邪魔だった」

「残念。正解は……と言っても犯罪者の多くが示した答えはこうです。子供を殺して通夜を行えば、また夫の同僚に逢えるから」

それは、わたしが最初にひらめいたアイデアとおなじだった。結論を差しかえたのは、なんとなく、ほかの答えがありそうな気がしたからだ。重たい、嫌な感覚が胸を襲った。

どうして。わたしは思う。ひとたび罪を犯してしまった人間は、選択肢のなかに暗い道をつけ加えてしまうのか。

「普通のひとはこの答えを思いつきもしないそうです。ヒナさんなら、きっと正解すると予想していたのですが」

まるでココらしくないもの言いだった。すくなくともわたしの知る彼女は、根拠もなしに相手をおとしめるようなことは口にしない。

「どういう意味」

おそろおそろココの顔をあおぐ。わたしの視線を受けとめたあどけない瞳の奥に、悪意の色が灯った。

「被害者は縁遠の親戚にあたる方だそうですね」

「なんの話」

「十年前、共謀してひとを殺した。酔っぱらったタクトさんが話してくれました」

「彼の言葉を真に受けないほうがいいよ。出まかせであなたをからかっただけ」

「本当でしょうか」

定食のトレイをよけ、ココは数枚の紙をテーブルに置いた。新聞の縮小コピーだった。いくつかの記事に、黄色いマーカーがひかれていた。

秋田で中年男性の焼死体。

焼身自殺か放火殺人か。

被害者は帰省中の会社員。

「事件はたしかに存在します」

淡々とした裏声が言い放った。

図書館の資料室にこもるココの姿が目には浮かんだ。好きなひとの過去をあばくため、昔の報道をあさる。じっとりとした、暗い情念だった。

「そして、犯人は捕まっていません」

被害者の姓は朝比奈だ。現場は祖父の家からちかい、廃屋である。わたし達はなんの関係もない、と居なおっても無駄だろう。

わたしはあたりを見まわした。昼休みも半ばを過ぎているが、配膳カウンターには長い列ができていた。テーブルも、ほぼ埋まっている。

ここで事件について言い争うのは気が進まなかった。

「そんなに調べてどうするの。なにが目的？」

「タクトさんから手をひいてください」

いまにも消えそうな、ふるえる声が告げた。

うつむきがちな視線。子供のような瞳が、うっすらと涙ぐんでいた。ほの紅く染まった頬は、ふれたら溶けてしまいそうなほど、熱を帯びているように見えた。

「彼と寝たのね」

はっと顔をあげ、ココは言った。

「タクトさんから聴いたんですか」

「違う。いま知った」

頬がさらに紅潮する。

「だましたんですね」

「確認しただけ。ココがただの片想いで、こんなに突っ走る子だと思えなかったから」

さげすむようなまなざしが、わたしをとらえた。

ふたりの友情もここまでか。わたしは他人ごとのように思った。もつとも、友情と呼べるものがあつたのかもあやしい。はじめから終わりまで、恋敵だったのだから。

「おふたりはいとこ同士でしょう。それに、傷をなめあうような関係は健全じゃないと思います。彼とはもう逢わないで。でないと、よくない噂が流れることになります。警察の方も来るかもしれませぬ」

言葉の勢いとは裏腹に、ココは怯えるように肩を抱いていた。

「そんなことしたら、タクトも不幸になる」

「あなたが身をひけば、すべてまるく収まります」

「ココが口をつぐめば、すべてまるく収まる」

「ヒナさんが消えてくれないと意味がないんです。彼は、あなたを愛しているから」

ココが思うのなら、本当にそうなのかもしれない。はなから未来のない関係だったのだ。も

うじゅうぶんな気がした。意を決して、わたしは席を立った。

「自殺だったとわたしは思ってる」

去り際に、ココに告げた。事件への関与だけは、否定しておきたかった。

「あの日、わたしとタクトは盛岡にいたの。現場から高速バスで二時間。電車でもおなじくらいかかる。警察の記録でも調べてみればわかるよ。わたし達にはアリバイがある」

たかが八歳の子供達の不在証明だ。丁寧に裏取りが行われたかどうかは知らない。

でも、こまかい捜査がされていたのなら、バスの運転手は証言したはずである。火災の発生よりずっと前に、わたしとタクトが盛岡行きの便に乗った、と。盛岡のおもちゃ屋も、ふたりの子供達が店に来たことを述べただろう。タクトが買ったプラモデルの領収書は、刑事に渡したはずだった。

「真実なんて関係なく、噂は広まります。いまはインターネットというメディアもあります」

議論するつもりはなかった。トレイを片づけ、わたしは食堂を後にした。

その足でパソコン室に向かった。

大学のホームページにつなぎ、一枚の用紙を印刷した。名前と学籍番号を書き、日付をいれた。理由の欄は「一身上の都合」でかまわないだろうかと考えていると、後ろから肩を叩かれた。

「なにやってるんだよ」

振り返ると、とがめるようなまなざしがわたしを見下ろしていた。

「退学する。タクトとももう逢わない」

「なんで急に」

答えずに向きなおる。続きを書こうとすると、ペンを握る指が、おおきな手のひらにつつまれた。

「放して」

抵抗しながら筆先を動かす。力をこめたふたりの手が左右にふるえる。バランスが崩れ、書きかけた「一」の文字が、途切れることなく紙の端を突き抜けた。視界がにじんだ。

「わたしがいなくなれば、みんなまるく収まるんだよ」

ひどく汗をかいていた。吐きだした息が熱かった。

「ヒナ、なんの話」

タクトの言葉をさえぎって声を荒げた。

「わたしさえいなければ」

数人の学生が驚いてこちらを見やる。かまわず、続けた。

「タクトだって人殺しにならならずにすんだ」

瞬間、頬をにぶい痛みが襲った。たたかれた顔を押しさえ、わたしは目を伏せた。

「ごめん。とにかく、要説明」

落ちついて話そう、とタクトの部屋に誘われた。

「引っ越し祝いしようぜ」

十畳ほどのワンルームマンションだった。

祖父の持ち家らしい。去年まで賃貸に出していたという。先月からひとり暮らしをしていることは聴いていたが、足を踏み入れるのははじめてだった。

高い天井。明るいフローリング。床の半分を楽器ケースが埋めていた。ユーフォonium。バイオリン。本棚にもたれて重なっているのは、ギターとベースだろうか。家具や電化製品はまだすくない。新しい壁紙の、化学的な匂いがした。

窓の前に、ひとりで眠るには広そうなベッドがある。ここで彼はココを抱いたのかもしれない。そう想像したら、ちくりと胸が痛んだ。ココと肌を重ねたときも彼は、八歳のわたしの背中を思い浮かべただろうか。ベッドの脚は高く、床との間にひとがはいれそうなほどのすき間があいていた。

まあ座れや、と彼は言う。

ソファも椅子もない。座布団も敷いていないのだから、寝床に腰かけるしかなかった。

硝子テーブルの上に、ステンレスの灰皿とタバコの箱があった。深紅の箱に横文字で「ラーク」と書かれている。

「吸っていい？」

「どうぞ。じぶんの部屋でしょ」

タクトは窓をあけた。きしむベッドを乗り越え、ベランダに立つ。電線をはさんで、低層住宅の群れが広がっていた。

「考えごとするとき、落ちつくから」

まるで弁解するように、タクトは火をつけた。

「嫌だったら言って。炎とか煙とか、トラウマだろ？」

「だいじょうぶ。うちのお父さんも吸うし」

タバコもお香もキャンプファイアーも平気だ。それより、映画やドラマで火事のシーンを目にしてしまうことのほうが苦手だった。

十年前のあの日。わたしは男を閉じこめた廃屋に火を放った。誰にも遭わないよう、道なき林をひたすらはしった。畑を越え、田んぼを迂回し、車道にたどり着いてから振り返った。山の端に紅いひかりが見えた。遠くでゆらめく火影は、幻想的だった。テレビの映像みたい。そう感じた。

「オヤジさんは元気？」

事件の直後、父の転勤でわたしの家族は名古屋に移った。それから、わたしは祖父の屋敷に行かなくなった。盆の時期にはいつも誘われたが、断った。宿題が忙しい。そんな理由でみな納得した。母は毎年、親戚の集まりに参加した。父はわたしと家に残ることが多かった。

「おかげさまで」

面白みのない答えを返す。わたしも心のなかで問う。先週電話したばかりだけど、名古屋の両親は変わらないだろうか。

「もう一本、いい？」

フィルターだけになったラクを、タクトは足もとの灰皿に押しつけた。

「気にしないで」

遠慮する必要なんてないのに。わたしは意地悪く勘ぐる。

「ココはタバコ嫌がるの？」

「ココのことは、すまなかった。酔った勢いで口がすべった。俺がなんとかする」

「もういいよ。わたしが消えればすむ話」

「だとしても、退学までする必要はないだろ」

「わかった。でもタクトとは今日で最後」

ヒナと離れるつもりはない。そう言って彼はわたしを見据えた。真剣な表情をつくったつもりだろうが、口もとが吊りあがっているせいでおどけて見える。きれいだが、損な顔だちだ。

わたしはふかく息をついた。

「はじめから、未来のない関係だったんだ」

「たしかに。結婚したら、アサヒナヒナになっちゃうな」

「名前のことじゃなくて」

「法学部なら知つといたほうがいいぜ。日本では四親等以上離れていれば婚姻関係になれる。いどこ婚も可能なんだよ」

「法律の問題でもない」

「とにかく。ココのことは、俺がなんとかする。場合によっては、最後の手段もある」

ベランダの外めがけて、タクトは煙を吐いた。けだるく細めた瞳に、暗いひかりが宿っていた

。

「怖いこと言わないで」

「すべての可能性を検討しているだけだよ。あらゆる情報を集め、案を出し、最善をなせ。じいちゃんの教えだ」

ひとたび道を外してしまった者は、けっして許されない方法まで可能性のひとつに数えあげてしまう。例の心理テストを試したら、おそらくタクトも正解を導くのかもしれない。

ふたつの吸いがらを載せた灰皿を持って、タクトは部屋に戻った。窓を閉める。ベッドをまたぎ、テーブルに紅い箱と銀の円盤を置く。

わたしのとなりに座る。細い腕がかかるく、わたしの背を抱いた。華奢な身体からタバコのかおりがした。

「なにがあっても守るから。いなくなるなんて言うな」

なんでそんなに。そうつぶやくと、ヒナが好きだからね、と返ってきた。

「嘘だ。顔が笑ってる」

「顔は生まれつきだから仕方ない」

「なんでわたしなの」

「ヒナコンだから、これも仕方がない」

「ヒナコンってなに」

「愛してるってこと」

わたしがひき出したあまい台詞。ふかく低い、音楽的な声。音が、意味が、耳を通り越して胸に落ちていく気がした。たまったほてりは、身体の奥で広がる。内側から撫でるように心地よく、わたしの肌をあたためていく。

「ココとはなにもないからな」

おもむろに彼は言った。

わたしは問いたださなかった。ココはそんな嘘をつく子ではないだろう。だけど、真偽を確かめるよりも、いまここで、幼なじみの言葉を信じてあげることのほうが大切だと思えた。

窓の外で豆腐屋のラッパが鳴った。置時計を見ると、時刻は四時をまわっている。

「そろそろ戻らなきゃ。五限の英語に間にあわなくなる」

「学校辞めようとしてたヤツが、いまさら」

笑いながら立ちあがり、タクトは言った。

「俺の車で送っていくよ」

かぼそい腕を差しのべる。座ったまま彼の手を取り、わたしは黙った。講義になんて、行きたくなかった。

「やっぱり一緒にいたい」

その文句が彼の心を射抜いたようだった。

タクトはカーテンをひいた。白いシャツの袖から、右ひじのケロイドがのぞく。あつい遮光布におおわれ、部屋は夜のように暗くなった。

枕もとに手を伸ばし、タクトはなにかのリモコンのボタンを押した。テレビの横でラジカセが点灯し、薄闇に青いひかりが溶けた。ゆったりとしたソウルミュージックが流れてきた。

「誰の曲？」

「キース・ワシントン」

聴いたことはないが、悪くなかった。かすれた男性ボーカルの声が、どこことなくタクトに似ている。音楽はひとつのインテリアのように、空間を埋めていく。目を閉じれば、粗野なワンルームも夜景を臨むナイトラウンジになる。

しずかに、でも確実に、鼓動が高まっていく。

「こんなロマンティックな曲かけて。どうするつもり？」

「雰囲気流されてしまえ、と誘ってる」

キッシング・ユーという単語が聴こえた。オーケー、とつぶやいた彼の顔が近づく。唇があわさる。タバコの味がした。

長い口づけのあと、ヒナ大好き、とタクトは言った。照れた。ヒナも言って、と迫る。とまどっていると、両腕が強くわたしの頬を抱いた。好き。すべらかな鎖骨に顔をうずめ、ちいさく声に出した。聴こえないと責められ、もう一度つぶやいた。

言葉は言霊だ。口にするとたん、あいまいな気持ちは真実に変わる。大好き。ふたたび、わたしは想いを告げた。

彼を支える肩に重さがかかった。その力学にあらがえず、わたしはベッドにくずれた。

楽器をあやつるように繊細に、手のひらが身体を撫でる。奏者の指先が、的確にわたしの吐息をうんでいく。あふれた声はときおり、湿った唇に封じられた。

ふいに、思い出したくない記憶が脳裏をよぎった。

「だいじょうぶ」

わずかな表情の変化を察したのか、恋人はやさしくわたしの髪をさわった。

音楽にあわせて、波紋のような感覚がひいては満ちる。リラックス、と彼がささやいた。言われてはじめて、じぶんがずいぶん緊張していたことに気づく。手のひらに、爪がくいこんだ跡をみつけた。力を抜くと、指先がふるえた。

彼を迎える瞬間に、待って、と声をかけた。聴こえないふりをして、タクトはわたしをつらぬいた。ぐっと押しひらかれるような感覚。割れそうだった。痛覚が麻痺してきた頃、背中見せて、と彼が言った。

わたしはうつ伏せに転がされた。命じられるままに腰をあげると、熱い楔がいつそうふかく奥をえぐった。さすがに、これは無理だった。

あやまりながら、身体を離す。乱れた着衣のまま布団にもぐり、ふたりでソウルフルな歌声に耳をすませた。トゥナイト・アイム・ユアーズ。そんな歌詞が聴き取れた。彼の鼓動を感じながら、いつの間にか眠っていた。

幸せな痛みは、翌日まで残った。

悪い噂が立つこともなく、二年の月日が流れた。とつぜん警察がやって来ることもなかった。タクトがココを説得してくれたらしい。彼女はあの事件について嗅ぎまわるのをやめたという

。ココとは、あれから逢っていない。姿を見かけても、わたしから声をかけることはしなかった。彼女もまた、わたしを避けているようだった。

タクトとわたしの関係は続いている。ココのことを考えて、キャンパス内ではなるべく彼と逢わないようにした。

三年生になると、ふたりとも忙しくなった。専門科目やゼミがはじまり、夏には就職活動の準備もスタートを切った。

論文の資料集めに追われるなか、ココから二年半ぶりの連絡を受けた。

肌寒い秋の午後だった。

指定された喫茶店におもむくと、いちばん奥の席に懐かしい顔があった。向かいに座り、ココとおなじものを頼んだ。

きれいになった、と感じた。髪が明るい色になっている。太かった眉は、細くゆるやかなカーブを描いていた。イヤリングはピアスに変えたようだ。

「元気だった？」

愛想よく笑顔を投げたが、うつろなまなざしが返ってきた。

店内を流れるジャズに耳を傾けながら、わたしはアイスコーヒーをかきまぜた。まだらを描いて、黒と白が溶けあう。ようやくココが口をひらいた。

「先週の土曜日、どこでなにをしていましたか？」

記憶をたぐる。たしか、タクトと渋谷で映画を観たのだった。そう告げるとココは、知っています、と答えた。

「どうしてです」

暗い裏声が問う。その言い方に違和感があった。よくない予感が肌を襲う。ためらいがちに、わたしはたずねた。

「もしかして、またタクトに遊ばれたの？」

「遊ばれた？」

ココは鼻で笑った。少女のようなつぶらな瞳が、わたしをにらんだ。

気圧されながら、わたしは言った。

「知ってると思うけど、タクトとわたしはつきあってる」

「知りません」

ココの両手がよわよわしくテーブルを叩いた。グラスの氷がかわいた音を立てる。スピーカーから、鍵盤を駆けまわるようなピアノの旋律が聴こえた。

「きっと、ヒナさんの勘違いですよ。タクトは、わたしの婚約者なのだから」

目を細めて笑う。ひきつった、あどけない顔にぞっとした。

「さんづけで呼ぶのやめたのね」

「余裕なんですね」

「違う。わたしだって混乱してる」

ゆがんだ眉。柔和なまなじり。桜色の頬。半びらきの唇。感情のボタンをかけ違えたようなココの相貌に、おぼろげな狂気を感じた。

「タクトは、ヒナさんと別れたと言いました」

「わたしには、ココとはなにもなかった、って」

「おつきあいはいつからですか？」

「一年生の四月。はじめから」

「おなじです。わたしも、はじめから」

胸に不快な痛みがはしる。胃の底が重くなった。恋敵の言い分がどこまで本当なのかはわからない。でも、すべてが狂言だとも思えなかった。

ココは鞆からぶあつい書類を取り出した。

「十二年前の殺人事件の考察です」

今度は古新聞のコピーではなかった。ページの左下にアルファベットの羅列がある。どこかのウェブサイトを印刷したものらしい。

「やっぱり、おふたりが犯人のようですね」

フリージャーナリストが未解決事件を追っているサイトだった。数枚めくる。読み進めるう

ちに、じぶんの顔が青ざめていくのがわかった。動揺を隠すように、わたしはコーヒーをはんぶんほど飲みほした。

「『スカイ・アンサンブル』の歓迎会のとき、カメラを掲げた先輩がいたのを憶えていますか？」

「なんの話」

「わたしはヒナさんの写真を持っています。名前と一緒に大学のコミュニティサイトに投稿したら、きっと広まるでしょうね」

もちろん、とココは書類の束を指ではじいた。

「そのページへのリンクもつけて」

どうすればいい、と訊くと、ココは用意してきたように、よどみなく言った。

「わたしの望みは、二年前とおなじです。彼のことはあきらめて。タクトはわたしを愛しています」

ココと別れ、タクトの部屋に向かった。

彼の帰りを待つ間に、パソコンを立ちあげた。インターネットにつなぎ、ココに教わったサイトを探す。すぐに見つかった。

ルポタージュふうの文章だった。フェルと名乗る自称ジャーナリストが、現地取材や警察への人脈を駆使して、あの事件を調べていた。

最初のページは、報道資料をもとにした、たんなる概要だった。次の記事に飛ぶと、見慣れた田舎町の写真が目にはいった。秋田におもむき、現場をまわったらしい。関係者への聴きこみもあった。個人名は伏せているが、わたし達の祖父の家も訪ねたようだ。

続いて、フェルの筆運びは、犯人の推理へと移っていく。

ふと、玄関の扉がひらく音がした。

「暗い部屋でなにやってんの」

いつからか、窓の外はすっかり陽が暮れていた。タクトはショルダーバッグを床に投げ、電気をつけた。

アルバイトを終えて疲れている様子だったが、かまわずわたしはモニターを示す。

「以下は僕の個人的な推察である。証拠はない……なにこれ？」

「いいから」

彼に席をゆずり、ベッドに腰かけた。

気にとまったらしい部分を、タクトはわざわざ声に出して読みあげた。

「僕が目をつけたのは、ある少年と少女だ。彼らは火災が発生した時刻に、盛岡にいたことになっている」

タクトは続けた。

廃屋が燃えているのが発見されたのは、午前十一時。その一時間前、十時には彼らは現場からほどちかい停留所で、高速バスに乗っている。運転手の証言も取れたと記録にある。

盛岡まではおよそ二時間。彼らはぴったり二時間後の十二時頃、盛岡駅構内の玩具店でプラモデルを買ったという。証拠となる領収書は、少年の手から警察に渡っていた。玩具店の主人から、それを裏づけるような発言もあったそうだ。

一見、なんの問題もないように思われる。

「そうだよ。アリバイは鉄壁だ」

タクトはモニターに向かってあいづちを打ち、続きを音読した。

しかし、僕はあやぶんだ。関係者のほぼ全員が、件のお屋敷にいたなか、どうしてふたりの子供達は現場から遠く離れた盛岡で、完全とも言えるアリバイを持っていたのか。僕は問題の玩具店に飛んだ。

幸い、当時の主人が出迎えてくれた。しつこく話を聴くうちに、とんでもないことがあきらかになった。

男の子の顔は憶えていた。しかし主人は、女の子の顔をはっきりとは見ていないらしいのだ。これは、警察にも話していないという。刑事に写真を出されて、少年のきれいな顔だちをよく記憶していたため「この子供達が来た」と言ってしまったそうだ。よくよく考えてみると、少女のほうは後ろ姿しか目にしていないことを主人は思い出した。しかしあえてそれを警察に告げる手間は取らなかった。

ここから、僕の推理を述べよう。

「やばいな。ほとんどあってる」

フェルの推論は、あの日のわたしたちの足取りをほぼ正確になぞっていた。

あの日、朝ごはんの後、わたしは廊下をひとり歩いていた。ふすまの陰からあの男があらわれ、わたしを例の廃屋に誘った。ただならない雰囲気があった。このひとは今日、わたしを奪うつもりでいる。そう直観した。

心の準備がしたいと理由をつけ、一時間後に落ちあう約束をした。気がとがめたが、タクトに打ちあけた。わたしと男のことを知っているのは、彼しかいないのだから。タクトは、一緒に逃げようと言った。

彼の言う「逃げる」は、立ち向かうことだった。バスの時刻表を確認し、誰にも見られないよう板の間へ行った。ストーブの横に灯油があった。力をあわせて、重たいボトルを運んだ。

屋敷の裏、小高い雑木林に廃屋はある。タクトとよく探検した場所だった。窓もない、ちいさな木造の小屋。さびた農具や木切れが散らばっているが、もう使われていない。まんべんなく、わたし達は灯油をまいた。ボトルは部屋の隅に投げた。

小屋のなかで男を待った。約束の時間より早く姿があらわれた。男が戸を閉めようとした瞬間、隠れていたタクトが踏鞴を振りあげた。男の後頭部を撃つ。あっけなかった。男は気を失った。

。

荒縄で男を縛りあげる。幾重にも、ちいさな身動きすらできないほど、柱に巻きつけた。

作業を終えると、わたし達は停留所に走った。十時の盛岡行きに間にあった。運転手に印象を残せるよう、あいさつしながら料金を払った。わたし達がいちばん乗りだった。後ろの扉では、

ここで下車する客がのんびりと順番を待っている。わたしはその列にまじって、バスを降りた。タクトはそのまま盛岡へ向かった。

ひと通りのない道を選んで、わたしは雑木林に戻った。森の奥、岩陰に身をひそめた。三十分ほど待ってから廃屋へ行き、マッチを擦った。男はまだ失神していた。炎が燃えあがったのを確かめ、わたしはふたたびバス停まで走った。

八歳の少女がひとりで乗れば目立つ。今度は運転手の印象に残らないよう、そばにいた家族づれの娘のふりをした。気配を消して、盛岡まで二時間。

午後一時には、プラモデルの箱を抱えたタクトと逢うことができた。バッチリ。そうタクトは言った。公園にいた、おない年くらいの女の子に声をかけ、一緒におもちゃ屋で買い物をしたという。女の子のほうは、後ろ姿しか見せていないそうだ。

ひどく疲れた。わたし達は駅ビルのお茶屋にはいり、あんみつを食べた。着物姿の店員に、何度も話しかける。最後のアライブ工作だった。

「幼いふたりがこれほどの犯罪におよんだのだ。なにか、当人たちにしかわからない、避けられない動機があったのではないか」

タクトの朗読は、結びの文にさしかかっていた。

情状をくんで、僕はこの原稿を出版社に持ちこむことを断念した。

しかしながら、物書きの業である。お蔵にいられてしまうには、多大な労と時間を費やしすぎた。世界の片隅にある、ちいさなこのサイトで発信するくらいなら、誰にも害はおよぶまい。

少年少女には未来がある。賢い読者の方々は、彼らを特定するような真似は避けてほしい。くり返すが、決定的な証拠はない。あくまで、しがないジャーナリストの妄想だ、と笑っていたきたい。

「それで全部？」

「らしいな」

勝手な言い分だ。特定するなど息まきながら、関係者が見れば、少年少女はわたしとタクトだとわかる書き方だった。

「どうするの？」

「どうもしない。俺らがフェルに文面の削除を求めたら、自白しているようなものだろう。大騒ぎして、逆に取材の対象にされてしまったら墓穴だ」

これどこで、とタクトは訊いた。

わたしはココと逢ったことを話した。

「ココとはなにもない」

彼は二年前とおなじ台詞を口にした。

「彼女は精神的にちょっとあやういところがあって。サークルでも問題になってるんだよ」

パソコンをつけたまま、タクトは灰皿を持ってベランダに出た。タバコに火を灯す。あけ放した窓を越えて、紫煙が部屋のなかに漂う。

考えごとをするときに落ちつくから。いつかタクトは喫煙にそう理由をつけた。いま、彼はな

にをふかく思案しているのだろう。わたしは口をひらいた。

「ココは、タクトが婚約者だと言っていた」

「そんなわけない」

「わたしには、どっちを信じていいかわからない」

「ヒナは俺を信じていればいい」

別れなければ悪い噂を広める。彼女はそうも言っている。

「俺がなんとかする。そんなことより、見てよ」

タクトは火を消して、部屋に戻ってきた。床に転がっていた鞆から、いくつかの封筒を取り出す。表裏に、英文が印刷されていた。

「学生課でもらってきた。俺、留学しようと思ってるんだ。この間、じいちゃんの家に戻ったときにある誘いを受けたんだけど」

わたしは行かなかったが、タクトは今年の夏も秋田に帰省した。

祖父は会社を十ほど所有している。そのうちのひとつに就職しないか、と祖父に打診されたらしい。未来の後継者として。

「はじめは断ったよ。縁故採用なんて論外だった。じぶんで道をひらきたいからさ。でも、しつこく口説かれて。お前は身内の誰よりも優秀だ、とか言いはじめてさ」

タクトはかねてよりあたためていた目標を告げたという。いずれ起業したい、と。それなら。祖父は提案した。うちで商売を学んでから独立すればいい。

「俺の気持ちは決まった。卒業までに海外の大学で最先端の経営と外国語を学ぶ。祖父の会社に就職して、すべてを吸収したら、じいちゃんに負けなくらいのビジネスを興す」

祖父は留学にいたく賛成したという。費用はすべて負担すると約束したらしい。

「ほら、あのひと、学歴ないから。子供や孫には高い教育を受けてほしいって願ってるんだよ」

祖父がどんな思想を持っているかなど、わたしは知らない。わたしがあの屋敷を遠ざけていた十年、タクトと老実業家の間にはさまざまな交流があったことだろう。

「じぶんの話ばかり、ごめん。ヒナは、資格とか取らないの？」

「運転免許なら去年」

「それじゃ意味ないよ。英語とか簿記とか、いや、法学部ならいっそ司法試験目指せばいいんじゃない」

タクトはいろいろな専門用語をまじえて、わたしの将来をプランニングした。自己分析。業界研究。インターンシップ。あまり興味を持たない話だった。目立たず普通に生きられれば、わたしはそれでいい。許されないあやまちを抱えた犯罪者にとって、なにが「普通」なのかはわからないが。

事件のこともココの話も、いつの間にか立ち消えていた。

彼にとってはどちらも、かるく笑い飛ばせる程度のささいな澱なのだ。夢想家は未来の航路を描くのに忙しい。比べればわたしは、時の回廊に置き去られたまま、過去ばかり見つめている。ふと、あどけないココの瞳を思い出す。彼女はよどみなく夢を語るタクトをあおぎ、うっとり

頬を染めるのだろうか。

留学中、恋人がいない日本でわたし達はなにをすればいいのだろう。あまりに情けなくて、訊けなかった。

ふたたびタバコを吸い終えてから、彼は汗の匂う身体でわたしを抱いた。キスのない一夜だった。

しずかな晩秋の夜。

かるい眠気と戦いながら、わたしはタクトの部屋で彼の帰りを待っていた。

ベッドに体育座りをして、ベランダの奥にひろがる夜景をぼんやりとながめる。

往来を走る車の群れ。クラクション。タイヤがアスファルトを擦る音が、閉め切った硝子窓を通して聴こえる。となりの部屋で流れる水道。どこかでまわっている、換気扇。

教授の急用で、ゼミ合宿が中止になった。週末の予定がぼっかりと空いてしまい、わたしは恋人のワンルームにおもむいた。

タクトにはまだ知らせていない。驚かせようと思った。疲れて帰ってきたとき、いるはずのないわたしが出迎えたら、喜んでくれるだろう。そう信じていた。

玄関の外から靴音が聴こえた。かさかさと、ビニールが鳴っている。続いて、話し声がした。女の声だった。

わたしはなかば本能的に足をしのばせ、扉に近づいた。ドアスコープをのぞく。コンビニの袋を抱えたタクトがショルダーバッグに手をいれていた。鍵を探しているらしい。そのとなりに、落ちつかない様子の子がたたずんでいた。ココだった。

声もれそうになり、両手で口を押さえる。くずれかけた身体を起こすと、吐き気をおぼえた。隠れなければ。反射的にそう思った。

手もとの鍵穴がおおきな音を立てる。

靴を取り、わたしは小走りにきびすを返した。慎重に、部屋の電気を消す。

闇のなかで、ベッドの脚の高さに目がとまった。靴を回収し、わたしはベッドと床の間にもぐりこんだ。

玄関がひらき、蛍光灯がついた。

薄暗い鼻先に、ベニヤ板がふれる。かすかなカビの匂いにまじって、木材のかおりがした。綿ぼこり。蜘蛛の巣。虫の死骸。寝がえりも打てないほどの平たい空間で、耳をすます。

タクトとココは、サークルの話をしていて。わたしの知らない名前が飛びかう。

しだいに、ふたりの口数がすくなくなっていく。

部屋が暗くなり、ソウルミュージックが流れた。

「だめだよ」

甘えるようなココの声。衣擦れ。ぴちゅ、と湿った音が不規則に生まれる。長い口づけ。男の吐息。

「好きだよ、ココ」

そうささやくタクトの声は、おさえられない欲動をはらんでいた。ふたりの体重を受けとめたベッドがたわむ。

全身が心臓になったようだった。冷えた指先に、肩に、首に、激しい脈を感じた。空気が薄い。フロアに張りついたままの、背中が痛い。留学から帰って来たら結婚しよう。タクトのそんな台詞が聴こえた。

まっすぐに手を伸ばせば、届くはずの距離だった。だけど、わたしとタクトの間には、木の板があって。マットと布団があって。ココがいて。いつからだろう。どこで間違えた。ベッドの上のやさしい声が、いまは、限りなく遠い。

きしみ続けるベッド。たがいの名をくり返すふたりのあえぎが反響する。ココ。タクト。やめて。叫びだしそうになる。大好き。わたしも。お願いだから。嘔吐感をこらえる。フローリングが冷たかった。肌が粟立っていた。それでも、身体の芯が熱くうずいていた。

情交の後、ワンルームにひとつの死体が転がった。

ワイパーがフロント硝子を撫でる。

遠くから汽笛の音が聴こえ、わたしの意識は現在にひきもどされた。

途切れたガードレールの奥で、東伊豆の海が闇をたたえている。かすかな波の音。樹々をうならせる、風と雨。かちかちと、橙色のあわいひかりが路面に明滅している。わたしは運転席に手を伸ばし、ハザードランプを消した。

わたしはもう一度、タクトに声をかけた。

「アクセル。踏みこんで」

彼が答えるはずはなかった。車も動かない。当然だ。タクトはすでに息絶えていて、車はエンジンをかけたまま停止しているのだから。

崖下に海岸線を臨む、下り坂の山道。まがりくねった道路を果てまで行けば、ペンションがある。はじめての旅行で、タクトと泊まった宿だった。

ガードレールの外れた急カーブは、あのときのままだった。思い出を反芻しながら、わたしはむなしいひとり芝居を続ける。

「もう一本、もらっていい？」

彼の胸ポケットから、ふたたびタバコを取り出す。火を灯し、咳きこむ。落ちつくなんて嘘だと思った。狂ったような鼓動は、まるで収まらなかった。カーナビの前にある携帯灰皿に、吸いさしの長いタバコを投げる。

「愛してる」

わたしは死斑が浮かぶ彼の首すじに顔をうずめた。襲いかかるような血の匂いに、息をとめる。硬直のはじまっていない腕が、ハンドルからすべり落ちた。力の通わない両手がわたしの背にふれる。抱きしめられたみたいだった。

頬に、最後の口づけをする。体温をうしなった皮膚は、驚くほど冷たかった。

唇を離す。おおきくひらいた瞳孔が、焦点のあわない視線を前へ向けていた。

ワイパーが硝子を擦る。

いつの間にか、雨はやんでいた。

ほんの数時間前。彼のベッドの下で息を殺していたのが、まるで遠い昔のように思えた。

化粧品を買って来る。情事後、そう言ってココは部屋を出て行った。ほどなく、タクトが起きあがった。バスルームから水音が聴こえた。シャワーを浴びているようだった。

わたしは狭い空間から這い出で、台所に向かった。戸棚をひらく。迷いはあった。だけど、ほかになにができただろう。

脱衣所で立ちつくすわたしに、タクトは驚きの目を向けた。その瞳に嫌悪の色が宿る前に、彼の時間をとめてしまわなければならなかった。さして抵抗もなく、果物ナイフは彼の胸をつらぬいた。

裸のタクトがくずれる。刃を抜き、もう一度振りおろす。返り血が顔にかかった。腹の底から、嗚咽が突きつきあげる。悲鳴のような声を出して、わたしは泣いた。

恋人の亡骸に服を着せた。左手の薬指に、見たことのない指輪があった。関節がひっかかって、なかなか抜けない。指を切り落とすことを考えていると、玄関の扉がひらいた。

怯えたココが、わたし達を見下ろしていた。その指に銀色のリングが見えた。ひるがえり、彼女は部屋から逃げ去った。廊下にヒールの音が響く。

時間はあまり残されていない。最期に、一緒に思い出の場所へ行きたかった。

玄関の竹かごから、彼の車の鍵を取った。華奢な死体を背負おうとしたが、持ちあがらなかつた。わたしはマンションの地下へ駆けた。エレベーターで台車を運び、部屋に戻る。毛布でくるんだタクトを載せ、ふたたびエレベーターで駐車場へ。彼をトランクに押しこむ。慣れない高速道路を乗り継いで、伊豆の海までたどり着いた。

ちいさなペンションへ向かう私道である。夜分にひとが通る心配はほとんどなかった。目的のカーブの手前で車をとめた。力を振りしぼり、わたしはタクトを運転席に座らせた。

「愛してる。子供のときから、ずっと」

闇色に広がる空と海を見据え、わたしはつぶやいた。これで幕をひこう。そう思った。

助手席から足を伸ばす。ブレーキを踏みながら、わたしはギアをドライブに入れた。

エンジンが低くうなる。

サイドブレーキをおろす。車はゆっくりと、坂をくだりはじめた。速度が増す。ガードレールの破れ目が迫る。

車体が揺れ、身体が前のめりに傾いた。

瞬間。腹の奥にちいさな動きを感じた。ふたつの細長い感触が、撫でるように内側を突く。それはまるで、指揮棒を振りかざすような仕草だった。

幻覚に違いなかった。まだ十週も経っていない胎芽だ。ほんの数ミリほどの、タクトとわたしの子供が、おなかを蹴ることなどありえないのだから。

たとえまぼろしの痛覚でも、それは、わたしの衝動をひき起こすのにじゅうぶんだった。

とっさにドアをあげ放ち、わたしは車道に転がり出た。受け身の要領で、地面をたたく。水た

まりがしぶきを跳ね、全身が濡れた。

背後から、にぶい音が幾度も聴こえた。

ぼうぜんと、アスファルトをながめる。道路の脇は暗い雑木林だった。遠く、ふかい森の奥に、ひと影が見えた。

はっきりとした姿形のない漆黒が、闇に揺らめいている。あれは、ひとではないのかもしれない。ぼんやりと浮かんだふたつの眼球が、こちらを見返していた。

〈了〉

フローラの追憶 ～女神たちの溜息～ 第二部

第一章 ストックの章

北川理子の中で青島真は果てた。そう、思いもよらずに真は童貞を失ったのだった。理子が満足
そうに言う

「あー気持ちよかったあ」

裸のままで立ち上がると、冷蔵庫の中からジュースを取り出し飲み干す理子だった。

真は、ヤッテしまった自分に複雑な思いを抱いていた。

話は数時間前にさかのぼる。

ニッケルイエロー 1 Vol2

春日部西口のカフェ・ド・モアと言う喫茶店に二人は居て、コーヒーを飲みながら二人は取り留めなく会話をしていた。

「もう冬ねー。バイクも寒いし」

「秋も終わりですかね。今月、油絵の公募に応募します。入選したら葉書を送りますから」「楽しみね」

そう言うと、理子はコーヒーカップに手をやった。

ニッケルイエロー 1 Vol2

窓の外を眺める理子。外の光景は十月も終わりに近づき、人々の装いも秋らしくさまざまな色彩で彩られていた。空気はさわやかな秋の風で、夏の喧騒を思い出にする程度に涼しさが理子と真を支配していった。

理子がコーヒーを飲み干すと、真の顔を覗き込んで言った。

「ね、しよか？」

「はい？」

真は理子が何を言っているのか、即座に理解出来なかった。窓外を見ると、きれいな青空の青さに真は思考するのを停止している自分が居たことを認めていた。「どうしようか」と言葉が真の頭の中をぐるぐる回る。

「えーそれってエッチしようってことですか？」

「決まっているじゃないの、あはは」

理子はさわやかな笑顔をたたえてそういう。真はその笑顔に負けた。やるしかないのか、と悟った。断る理由は涼子への忠義だったが、自分の中に沸き起こる性欲を抑えるのは無理なんだなと真は得心した。

「いいですよ、いきましょう」

「よーし、男ならそうでなくちゃね」

理子の様子が静寂から沸き立つ明るさで違って見える。女ってこんなものなのか、真には不思議だったが、もうホテルへのレールは定まってしまっていたので、真は逃げることは出来なかった。ただ初めての事態に、真のデザイナーとしての訓練された問題解決能力が次の課題をどうするか、それについて真の思考能力は費やされていった。

「あのーゴムとか持ってません」

「んーララのマツキヨで買って」、

ニッケルイエロー 1 Vol2

果たして、ララガーデンのマツキヨでコンドームを買った真は理子に引っ張られるように春日部駅西口の裏通りにあるホテルへと引っ張り込まれたのだった。

ニッケルイエロー 1 Vol2

二人はホテルをチェックアウトして出ると、バイクを置いてあるララガーデンの駐輪場へ向かった。今日はここで別れようと、理子が仕切った。真は完全に主導権をとられた形で初めての性交の余韻を咀嚼するのに精一杯だった。

「それじゃ、また」

真の内面は動物としての性欲の発露と、人間としての理性と涼子への思いとで、揺れていた。そんな葛藤の中理子に挨拶出来るのはそんな一言だった。

真はバイクにまたがった。そして発進。家に戻る気にはなれなかったので国道十六号を大宮に向けて走らせた。理子もまた家に急いだ。明日はフライトがあるからその準備をしないではいけないのだった。

ニッケルイエロー 1 Vol2

こうして、特別でもない二人の特別な一日が終わった。勝利者はこの場合女性になる。理子は堂々と真の童貞を食べたのだった。

日曜日、真は十月末に開かれる、油絵の公募の作品の額を調整していた。F 20号の油絵作品で、半年間かけてじっくり描いた自信作だった。公募に出す、という行為をするのは高校の美術部で埼玉県の県展に出して以来ひさしぶりのことだった。

仕上がった油絵をしげしげと眺めながら、久しぶりに自分の画家になりたい欲求を形にして人に見てもらおう、という行為に真は満足していた。

昨日、理子との行為の余韻はまだ残っていたが、一度きりの過ちという区切りで、ココロの思考は涼子に寄せようと、真は手を動かしながら、気持ちの整理をつけていた。

月曜日、ワンダースケープに出社した真は西園寺恵子の直感に見抜かれていた。

「真くん、なんか雰囲気が違う。締まった感じがするわね」

「はあそうですかね。」

ニッケルイエロー 1 Vol2

ととぼけながら、でも、おとといの行為で腰が筋肉痛な真は動作がぎこちなかった。その以前とは違う、何かをオナナの直感は見抜いたのだ。

「ははあ、やったな。相手は誰？北川さん？早瀬さん？早瀬さんは難しそうだから、北川さんかな」

「あ、やっぱり分かったやいます？」

「んー涼子さんはムリ目だから、話に聞く北川さんね、スチュワーデスの」

「よくわかりますね、オンナの直感ですか？」

「そういうことよ、いや、めでたいから今日は飲もう」

「めでたいですかね、自分は好きでもない女の人と出来ちゃう自分に戸惑いが」

「その程度の女々しさだと、今の時代、オンナをリードできないわよ。ちょっと遅れてるわよ、アンタ」

「はあ。今日はフローラ行くんです。どうしよう、早瀬さんとどういふ会話したら分からない」

「おたついでないで。相手は一度は結婚してる女性なんだから、子供なあなたとは違うの。たとえば年が上でもアンタは恋愛初心者なんだから、流れに任せるのよ」

「ハイ、わかりました」

真はこれ以上恵子に突っ込まれると自分が傷つきそうな予感がしたので、分かったふりをしてマッキントッシュコンピューターを立ち上げ、ルーティンワークの八百屋のチラシのデザインを始めた。九時に始まって十二時までには終わるだろうから、そうしたらフローラに行ってサイト更新の原稿の受領と打ち合わせを早瀬大三としなくてはならなかった。マッキントッシュを操作しながら、真は早瀬涼子の事を思っていた。

「うーん、どんな顔して会ったらよかろうか」

悩みながら真はマッキントッシュにデータを打ち込んでいく。

黒田一義が話しかける。

「今日はフローラでサイト更新の打ち合わせだったな。しっかりやって来い」

「はあ、まあなんとかやってきます」

「どうした、覇気がないな。何かあったの？」

「いえ、別に何もありませんよ」

恵子が奥の机から大声で割り込んでくる。

「真くん、ついに男になったそうですー」

「え、そうなの、相手はフローラの早瀬さんか？いや、違うな。スチュワーデスか？」

「いいじゃありませんか」

と真は事実なのだが、周りに認められるということは、なんだか真にとっては環境が変わって戸惑いを覚えていた。

ニッケルイエロー 1 Vol2

「まあいいじゃないか、早めに捨てられてよかったな。俺の友達は45歳でオンナと付き合った事がなくて未だに深夜アニメに夢中で生きてるのがいるよ」

「え、そうなんですか、いえね自分はいつまで童貞だろうとは思いましたが、思いもよらずに捨てちゃいました。でも自分は北川さんより早瀬さんが好きなんです」

「据え膳だったんだろう？なら食って正解、壁を越えても、なんだたいしたことはないだろうって分かったかな」

「そうですね、気持ちいいっていうか、自分でも出来るとは思ってませんでしたけど」

「オンナが分かった気がするか？」

「いえ、そういうことはあんまり気にしてないです。ただ、なんかなあとと思うし、オンナのはかなさみみたいなものは感じましたかね」

ニッケルイエロー 1 Vol2

「そうか、三島由紀夫も不道德教育講座って本で、早めに捨てたほうがいいってな、青春時代に読んだなあ」

「まあいいです、とにかく八百屋のチラシ、キャンプ出したたらフローラに行きます」

「そうかそうしてくれ、俺はちょっと営業にいつてくる、恵子、後は頼んだぞ」

「はい、わかりました」

そう言うと黒田はカバンを携えてドアを開いて出て行った。

「それじゃーアイハブコントロールだ。指示は私が出します」

「はい、八百屋のカンプ出します」

11時50分ころになって真は八百屋のチラシのキャンプを出して、恵子にチェックを入れてもらうことにした。フローラのアPOINTメントは十二時だったので、ちょっと時間が押したのだが、とりあえず真は連絡を入れないで、出発することにした。ワンダースケープのある春日部東口から、連絡地下道を通って西口の春日部郵便局前は歩いて15分ほどだった。真はデータの入ったノートパソコンをカバンに入れて、足早にフローラへ向かった。フローラはいつも通り、穏やかなたずまいで営業していた。真は春日部郵便局前から信号をわたって、フローラの前に着く。

「こんにちは、ワンダースケープの青島です」

「おお、こんにちは」と男性スタッフの熊田が対応に出た。

「社長は奥で待ってますんで、中に入ってください」

「はい、よろしくお願いします」

と言うと真は店の奥の事務所に入っていった。

入ってみると社長の早瀬大三がパソコンに向かって、どうやらツイッターをやっているようだ。

「こんにちは社長、ツイッター始めたんですか」

「おお、青島君、うむ、桜子に教わって始めてみた。結構面白いなこれ。飲み仲間が春日部で増えたよ」

ニッケルイエロー 1 Vol2

青島はツイッターに熱狂している時代があって、オフ会などにも参加したが、芸術の同志とトコトン話す糸口は見出せなかったので、もっぱらMIXIのコミュニティでゆっくりしたつながりのほうが今は好きだった。

ニッケルイエロー 1 Vol2

「自分もツイッターやりましたが、あんまり面白くなかったです。マンガ家のフォローとかいっぱいやってましたけど、マンガ家のツイートはつまらないですね。MIXIの方が趣味の合う人が結構いっぱいありまして、そのほうでゆるくやってます」

「俺はとりあえず毎月飲み会があるから、いいや」

「それより本題に入ろうか。」

「はい、そうですね。サイトの更新ですね、何か変えますか」

「そうそう、クリスマスキャンペーンで冬の花をセールしたいから、何かその辺でホームページを変えてみたいんだけどね」

「キャンペーンですね。」

「クリスマス、にあわせて、クリスマスローズとかガーデンシクラメンとかクロッカス、ストックなんかをアレンジしたフラワーアレンジメントを安く、と言う方針でやってみようかと思う。冬は花屋も暇だからね」

「なるほど、分かりました。コンセプトは大体分かりました。写真はどうしましょう」

「フラワーアレンジは熊田に作らせる。写真は涼子にとってもいいしワンダースケープでいいカメラ持ってるならそっち使ってもいいね」

「涼子さんのiphoneで撮ってもいいですが、うちにはデジタル一眼ありますんで、素材が確定したら、写真は撮りに行きます。」

「よし、あとは文章だな。構成は任せる。文章は熊田、涼子と相談してみる。出来あがったらファックスで送る」

「はい、それでは、早速ホームページの構成は考えてまいります」

「よろしく。涼子にも顔合わせに行ってくれ。もうすぐ配送から帰ってくる。相手してやってくれ」

「それじゃ、モスバーガーで昼飯を食べながら、待っています」

「おう」

真は涼子を待つ間、昼飯を隣のモスバーガーで食べることにした。アメリカンドッグとコーヒーだけの簡単な食事だったが、涼子が店に戻ってくる間の時間つぶしにはちょうどよかった。アメリカンドッグを食べ、コーヒーをすすりながら、真はどんな顔をして涼子に会ったらいいだろうか、そんなことを考えていた。涼子のことが自分は好きなのだ、という気持ちと、性欲先行、興味先行で童貞を失ってしまった後ろめたさ、そんな気持ちが、ちょうどコーヒーに入れたミルクが混じっていくのと同じようなそんな意義を自分の中に認めて、「そうか大人になるってこういうものか」と、つぶやきながらコーヒーをかき混ぜては思っていた。

真のiphoneのアラームが鳴る。胸のポケットから取り出して見ると涼子からのメールが入っていた。

（もうすぐ店に着きます。待っててください）

との短い一文が入っていた。真は以前の喜びとは違って、一枚トレーシングペーパーを掛けたようなそんな言葉の受容に感性が切り替わっているのを感じた。モスバーガーを出てフローラの店先で秋の花を見て、春や夏の趣とはまた違った美しさを見出していた。背後に車の止まる気配があったので振り返るとフローラの軽トラックが停まった。早瀬涼子が美しい髪を振りながら降りてきた。二人は目を合わせて、そのとき一瞬時が止まったようだった。

「こんにちはー。てへへ、白岡まで配達に行ってきました。インターネットのおかげで仕事の地域が大きくなりまして、配達が大変です」

「そうですか。どうです？お茶でも。今モスでコーヒー飲んだばかりなんですが」

「あら、あたしはお昼まだなんで、デニーズに行きましょう」

「いいですよ。デニーズで」

「熊田さーん、ちょっとお昼食べてきますー」

「ああ、行ってらっしゃい」

二人は交差点を渡り、デニーズへと歩いた。真は涼子の姿を眺めながら歩いた。髪を束ねるライムグリーンのリボンが印象的で美しいと感じた。涼子の主義は髪を染めないということだった。たとえば同僚の西園寺恵子は髪を染めているが、涼子のそれは美しい黒髪で、顔の聡明な美しさを引き立たせていて、それが何よりも真は美しく感じて、「ああ、この人の肖像画を描いてみたい」と思った。思った瞬間、それを涼子に言葉にしていってみようと、デザイナー的発想で行動に移そうと思った。

程なくデニーズに入ると店の中はランチタイムだったが人影はまばらで、二人はゆっくりとテーブル席に着くことが出来た。

「あたしはジャンバラヤ」

「自分はコーヒーでいいです」

「昼は何食べたんですか？」

「モスでアメリカンドックとコーヒーです」

「あら軽く食べたんですね。おなか減りませんか？」

「そうでもないですよ。自分食欲があまりないので」

「今日は白岡の喫茶店にフラワーアレンジメントと配達に行ってきました。白岡なんて春日部より道が分からないので大変でした」

「そうですか、ああ、あの車はGPSとかついてないんですね」

「そうです、地図をコピーして行ってきました。旧四号を軸に考えていったからそんなに迷わなかったんです。行って見て、おしゃれな喫茶店でした」

「ほう、そうなんだ。喫茶店はしばらく行ってない。家でレギュラーコーヒー飲みながら絵を描く習慣で、友達とはマクドナルドで百円で飲む習慣になっているから」

「その喫茶店でコーヒーご馳走になって、とても美味しかったわ。夫婦でやっているんですって」

「あの、話変わって、ひらめいたんですが」

「何を閃いたの？」

「えーと、あなたをモチーフに油絵を描いてみたいのです」

「えっ、私にモデルになれって事ですか」

「そうです」

「出来るかな。って実は、高校生のころ美術部の友達に誘われて、絵のモデルやったことあるん

ですけどねー」

「そうなんですか、それは初耳。モデル料は一枚につき三千円でどうですか、お金あんまり無いのでそのくらいしか用意できないんですけどねえ」

「いいですよ。服は何を着ていけばいいかしら」

「いえ、フローラに勤めてる、その時の服でいいんですけど、青か緑を基調にした服なら自分の好みです」

「分かりました。いつ描きますか」

「今週の土・日は空いてるんですけど」

「日曜はフローラが忙しいので土曜日がいいです」

「それじゃ、それで行きましょうか」

「ああ、でもお願い」

「はい」

「ユナイテッドシネマの名画座で『小さな恋のメロディ』って古い映画やるんですけど、今週いっぱいなのです。インターネットで調べるとすごく面白い映画みたいだから、土曜日、それを見たいんです」

「へー小さな恋のメロディですか。帰って調べてみよう、じゃあ一緒に見た後、自分ちに来てください」

「えーっと、土曜日十時三十分の回しかチャンスないです」

「じゃあ十時に」

「分かりました」

「よろしくです」

二人はフローラまで一緒に歩いて、店の前で別れた。結局、自分と北川理子の関係が深まったことは言えずに分かれた。でも、真は涼子の美しさの前に、自分は何も悩むことも裏腹な心もどこかへ行って、ただ楽しい時間だったことを思い出すと、自分の涼子への思いの確信が深まることを実感していた。

フローラに戻ると恵子がぼんやり窓の外を眺めながらタバコを吸っていた。どうやら仕事は終わったらしい。黒田も帰ってきていて、マッキントッシュをぼんやり動かしていた。仕事は無いようだった。

「ただいまもどりました」

「よし、サイトの更新の話はすすんだかな」

「写真はウチで撮ることと、構成もウチで。あと文章は向こうで考えるそうです」

「そうか、涼子さんとは話したのか」

「そうそう、このオンナの敵、どうしたのよ」恵子が冷ややかに話しに入ってくる。

「えーっと北川さんのことは何も言えないっていうか、言う機会は無くデートの約束とかしちゃいましたけど」

「ふーん」

「ララガーデンで小さな恋のメロディって映画見る約束して、その後は自分ちで油絵のモデルやってもらう約束になったのです」

「ほー小さな恋のメロディね。俺が高校生のころ見た映画だよ」

「そうですか。早瀬さんがインターネットで調べて、いいっていうから、一緒に見ようか、という話になったんです」

「いい映画だよ。ビーズとかクロスビー・スティルス・ナッシュアンドヤングとか音楽がいい。ネタばれになるけどラストのどこまでも線路が続くラストシーンは、俺も主人公の二人の将来を思ってみてジワッと来た映画だったな。ティーチ・ユア・チルドレンはお勧め。俺もゲオで借りて見るかな。30年ぶりに」

「へー自分もちよっとインターネットで調べてみます」

「今日はもう仕事ないから飲むか」

「いいですねー」

と、三人は飲むことにした。真は肝心の映画を検索でざっと調べてから出発したいと黒田と恵子に言った。

インターネットで検索して話の内容を調べる真。

「ふーん、メロディって女の子が主人公なんですね。」

「まあそうなんだが、淡々と若すぎる二人のみずみずしい恋が描かれていてな。イギリスで作られて、アメリカではぜんぜん不発だったけど、日本じゃ大ヒットした映画だ。俺もサントラのLPを未だに持っている。なつかしす」

「分かりました。それじゃラウンドアバウトに出発しましょう。」

三人は事務所を閉めて、ラウンドアバウトへ向かった。時間は五時をちょっと回ったくらいだ。秋の夕暮れのひんやりとした空気の中、つるべ落としの夜の中で三人は歩いていった。

やがて土曜日がやってきた。十時にフローラの前で待ち合わせの約束だったから、真は九時五十分にはバイクでフローラの前に着く。帰りに涼子を乗せて自宅へ一緒に行くということだからヘルメットは使い古しのバイザーが壊れた、そう上野で安く買った中国製のメタリックグレイのヘルメットをバイクにくくりつけて、やってきた。

フローラの前で涼子が立って待っていた。流行のライムグリーンのシャツと、ロングスカート、髪の毛はもうトレードマークになりつつあるライムグリーンのリボンでまとめて、フローラ就役時のジーンズではない、女らしさを演出していた。

「や、バイクはここに止めておいていいかな」

「いいですよ。ララガーデンまで歩いていきましょう」

「そうしますかね」

二人は春日部郵便局の前をとおり市役所前の交差点を曲がってララガーデンに入っていった。果たして映画は時間通りに始まった。

映画は主人公たちの描写が淡々と進んだ。そこに真は涼子との仲を重ね合わせて、映画にのめり

こんでいった。ビージーズの楽曲が美しい。涼子も微動だにせず銀幕に視線を置いている。やがてクライマックス。二人が駆け落ちを執行し同級生たちの前で結婚式を挙げ、教師たちが退散して、トロッコで脱出していくラストで胸がすくような思いをするのは二人は同じ気持ちだった。

映画が終わってユナイテッドシネマから出るまで、二人は言葉を交わさなかった。

「いい映画でしたね」

「そうですね。熊田さんもぜひ見なさいと言ってました」

「自分も黒田さんにいい映画だから、と言われてます」

「30年前の映画って思えない。ビージーズのCDをアマゾンで買います」

「あとCSNY。自分はエンドロールのティーチ・ユア・チルドレンが好きです」

「ふーん、喜んでもらって、この映画に誘ってよかったかな」

「いい映画でした」

「それでは、ご飯を食べて青島さんのおうちへ行きましょう」

「うどんがいいですかね」

「うん」

「じゃうどん」

二人はララガーデン三階のうどんやでうどんを食べた。フローラに戻って、涼子に説明して、バイクでタンデムで真の自宅に連れて行く事を告げた。

「ヘーヘルメットって初めてかぶるわ」

「バイクは乗ったこと無いの？」

「無いです。初めてです」

「それじゃヘルメット被って、出発しましょう」

「はい」

実は真もタンデムは初めてだったが、教習所で教官とタンデム走行したことなどを思い出し、ゆっくりバランスをとりながら走り出した。

旧4号に出て、藤塚橋の交差点を左折して橋を渡れば、香取神社近くの戸建ての住宅が見えてくる。ファミリーマートの信号を右折してすぐのところに真の実家はあった。

バイクを停めて、二人は家の玄関に立った。真はエスコートするようにドアを開けた。そこには真の母親が待っていた。

「お帰りなさい。あら女の子連れてきたのね。初めてじゃない。こんにちは」

「こんにちは、何か絵のモデルやるって事で今日は伺いました」

「よろしくお願ひします、何せ真が女の子連れてくるのは初めてなのよねー。母親としてはうれしいわ」

「えーっと早速二階の自分の部屋へ行きます」

「お茶とか出さなくいい？」

「いいよ、すぐ終わるから」

「えっ絵を描くのそんなに早いの？」

「そうでもないんですが、軽くアタリをつけてディテールは写真にとってそこから起こしますから一時間くらい座ってもらえればオッケーです」

「ふーん」

二人は二階に上がっていった。部屋に入るとかもし出されるのは油絵の具の匂いだった。パソコンの置いてある机と部屋の真中にはイーゼルが置いてあり、立てかけられているのは真っ白なF20号のキャンバスだった。

「自慢したいのはこのイーゼルです。イタリア製でブランドはマーベフって言います」

「おーイタリア製。高かった？」

「そんなに高くは無いけど組み立て式で結構めんどくさかったです」

「家でもパソコン、使ってるのね」

「家ではウィンドウズ使ってます。仕事はマッキントッシュなんですけどね」

「わー本棚、画集とCDでいっぱいですね」

「そうですね。本も棚に納まらないほど持ってましたが読み返さない本は全部ブックオフに引き取ってもらいました。電子書籍の時代が来るから、たとえば小説の単行本なんかはもう紙の本で買わないです。キンドルやコボで読んだほうがしっくりくるのでパソコンにばかり向かっているとそうなります」

「本は私は紙のほうが好きだなあかさばるけど」

「かさばると言えば雑誌もほとんど買わなくて。買うのはマンガ雑誌でアフタヌーンって雑誌くらい。それもすぐに廃品回収に出しちゃう。それくらい紙の資源からは遠ざかっています」

「では絵のモデルになりましょう。椅子に座っていただいい？」

「はい、椅子持ってきますから」

と言って、真は隣の部屋から椅子を持ってきた。そこには美しさや面白みをなんとか涼子の中に見出そうとする芸術家の眼差しと行動があるのみだった。

「はい、椅子です。とりあえず座って手は組んでひざの上に。楽な姿勢でよいので、大まかなデッサンが終わるのは一時間かかりませんから」

「はい、こんな感じでいい？」と髪の毛を書き上げながら整え後ろに回して涼子が体勢を整えた。

真はエンピツを出してF20号のキャンバスにアタリから精密な部分までを大まかに捉えて描いていった。油絵の技法としては木炭で描いてフィクサチーフが伝統的だが、真はエンピツで描いて、油を乗せたときエンピツが溶けてにじむほうが好みだった。淡々と真は涼子の美しさをキャンバスに転写させていった。涼子は高校生のころ、美術部に請われてモデルをやったときのことを思い出して、じっと一点を見ながら微動だにしないで真の作業を見守っていた、いや、見守ると言うよりは感じていたと言ったほうが正しいかもしれない。ともかく、一時間が過ぎて、真はかなりの描写をキャンバスに現した。

「ふう、とりあえずエッセンスは凝縮してエンピツで描きました。ディテールは時間かかるので

写真に撮りますね」

「はい」

そういうと真は棚からデジタル一眼レフを取り出した。去年のボーナスで買った、ニコンのD40だ。ファインダー越しに涼子を捉え、まずオートで一枚、ズームアップして露出を代えてもう一枚。もう一回引いて自動露出で一枚。真はファインダー越しに写るこの花の女神の美しさを永遠のものにしたい、そんなことを考えながら、シャッターを切った。

「はい、終わりました。お疲れ様でした」

「あら、もう一時間経ったの早いわね。この部屋の油絵の具の匂い、高校生のころを思い出すわ。高校では選択科目、美術を選択してたの。油絵の具、実家にまだ置いてあるの」

「そうですか、今度は学校の成績とか、誰かが誰よりうまいではなく、自分の楽しみに描いて見たらいいんじゃないですか」

「青島さん、絵を教えてくださいます？」

「まあ自分も人に教えられるレベルではないかもしれませんが、いいですよ。でも俺道具オタクなところあるから。ほんとに絵で食う人はそんなこと気にしないでもいい絵は描けるのかもしれないけど」

「まあいいじゃないですか。打ち込むことがある男の人って素敵です」

「そういうことも言われるの初めてですね。中学のころから絵を描くのが面白くてやってきたことですから」

「とても」と涼子は区切っていった。

「とても素敵です」

その一言で真は涼子に対して抱えていた「トレーシングペーパーを一枚かぶせたような」感覚が吹き飛んで、リアルな涼子の心遣いが自分の胸に届いたような気がした。財布から三千円を取り出し、涼子に渡した。涼子は遠慮したが、真は納めてもらった。

「それじゃ、私、帰ります」

「バイクで送っていくよ、フローラまで」

「そうね、一ノ割まで結構歩くから乗せていってもらおうかな」

「よーし行こう」

そうすると二人はまたバイクに乗り、春日部駅西口まで古利根川の川沿いを北上してユリノキ橋で川を渡っていった。真の、童貞を失った二つの心は統合されてひとつになった。涼子への思いは真の心の安定剤になったようだった。

秋は深まり、そろそろ木枯らしの吹く冬の到来は間近だった。

続く

参加者データ・クレジット

「午後0時の時計台 お菓子の匂いに誘われて」

文 星野真奈美

プロフィール 現実世界に劣らない豊かな物語の世界を描くために邁進中。調べ物をしたり取材をしたり執筆のために東奔西走。文字書きサークルでは他メンバーと世界観を共有しながら本を作成。もっといろんな方とコラボして本を作るのが目標。興味をもたれた方はぜひWEBサイトにお越しください。

メールアドレス apple_jack24@yahoo.co.jp

WEBサイトのアドレス <http://nagai.koborezakura.com/>

イラスト

たかはしいちこ

URL <http://strawberry-11.p1.bindsite.jp/>

メール ichiko.taka@gmail.com

「専門学校卒業後、イラストグループ展を中心に活動中。
今春より、イラスト入り旅行エッセイも執筆開始。」

「闇に走れば」

文 姉崎あきか

ライター・記者・書評家。金融関係のオシゴトが多い、駆け出しライター。書籍の代筆、ウェブサイトのキャッチコピー、業界新聞などを手がける。自分の名前で本を出すのが夢。ジブリ映画とJポップが好き。写真の勉強中。愛犬のシーズー、モモが宝物。E-mail:akika_54@yahoo.co.jp、twitterアカウント：@akika_a。

「フローラの追憶 第一部」

文・イラスト ブルーアイリス・中島英樹 URL:<http://www.blueiris.jp> メール
blueirisr8@yahoo.co.jp

表紙イラスト

平田みな子

URL : <http://ameblo.jp/milkpowder3/>

mail:hietaichigo@gmail.com

